

館報<sup>1985</sup> 34

# ANNUAL REPORT

BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

石 橋 財 団

ブリヂストン美術館  
石 橋 美 術 館







ブリヂストン美術館  
BRIDGESTONE MUSEUM OF ART

石橋美術館  
ISHIBASHI MUSEUM OF ART

館報 1985 34  
昭和60年度

目次 Contents

1	設立趣旨, 機構・運営	2
	Brief History, Organization & Management	3
2	主な記録	4
	ブリヂストン美術館	
	・特別展示	4
	・土曜講座	6
	・その他	8
	石橋美術館	
	・特別展	9
	・特別展示	14
	・美術講座	16
	・その他	16
3	1985年度入場者数	17
4	新収蔵作品 New Acquisitions	18
5	修復記録	28
6	研究報告	31
7	美術館案内 Guide to the Museums	47



---

## 設立趣旨

### ブリヂストン美術館

ブリヂストン美術館は、石橋正二郎氏（1889—1976）が多年にわたって蒐集愛蔵した内外の美術品を、社会公共のため、広く一般の鑑賞に供し、文化向上の一端に貢献したいとの趣旨に基づき、1952年（昭和27）1月8日、ブリヂストンビルディング建設の機会に同ビル内に開設されたものである。その後1956年（昭和31）4月に設立された財団法人石橋財団がその経営を継承し、1961年（昭和36）9月には同財団が石橋氏から所蔵美術品の寄贈を受けた。なお、1959年（昭和34）5月には面積が二倍に拡張されると共に、設備に大改良を加えた新装工事が完了した。

### 石橋美術館

石橋美術館は、ブリヂストンタイヤ株式会社（現 株式会社ブリヂストン）の創業者・石橋正二郎氏が1956年（昭和31）4月26日、同社の創立25周年を記念して、社会公共の福祉と文化向上のために、郷土久留米市に寄贈した石橋文化センターの中心施設である。1977年（昭和52）、石橋正二郎氏の遺族の寄付により増改築が行われ、同年4月以降、久留米市の要請により、石橋財団がその経営に当たっている。

## 機構・運営

### 石橋財団

（1986年3月31日現在）

理事長	石橋幹一郎
理事	鳩山威一郎、茅 誠司、盛田昭夫、有田一寿、氷室憲吉、真藤 恒、嘉門安雄、谷口鉄雄
監事	亀徳正之、赤司二郎、唐澤高美
評議員	石橋幹一郎、龍頭文吉郎、鶴澤 晋、石井公一郎、茅 誠司、小林行雄、郷 裕弘、河北倫明、谷 信一、朝吹三吉、氷室憲吉、石橋 寛、真藤 恒、高碕芳郎、吉久勝美、有田一寿、橋口 収、高階秀爾、友部 直、嘉門安雄、谷口鉄雄、門司一二三

### 美術館運営委員会

委員長	石橋幹一郎
委員	河北倫明、谷 信一、朝吹三吉、脇田 和、高階秀爾、友部 直、石橋 寛、嘉門安雄、谷口鉄雄

### 事務局

事務局長	門司一二三	総務部長	朝比奈仙二
------	-------	------	-------

### ブリヂストン美術館

参与	久保貞次郎	事務部長	大崎新一	学芸課長	阿部信雄	主任学芸員	大森達次
館長	嘉門安雄						

### 石橋美術館

館長	谷口鉄雄	事務課長	渡辺啓一郎	学芸課長	田内正宏
----	------	------	-------	------	------



---

## BRIEF HISTORY

### BRIDGESTONE MUSEUM OF ART

On January 8, 1952, in celebration of the completion of the Bridgestone Building, Mr. Shōjirō Ishibashi (1889—1976), ever mindful of the promotion of cultural development in Japan, opened to the public an art gallery within the building, under the name of “Bridgestone Gallery.” Mr. Ishibashi’s personal collection formed the nucleus of the exhibits of paintings, sculptures and other objets d’art. In April 1956 the management of the Gallery was taken over by the Ishibashi Foundation, and in September 1961 Mr. Ishibashi donated numerous art works of his collection to the Foundation. In May 1959 the Gallery was considerably enlarged and entirely renovated, and in January 1968 the English name was changed from “Bridgestone Gallery” to “Bridgestone Museum of Art.”

### ISHIBASHI MUSEUM OF ART

On April 26, 1956, in celebration of the 25th anniversary of the founding of Bridgestone Tire Co., Ltd. (present name : Bridgestone Corporation), Mr. Shōjirō Ishibashi, the founder of the company, donated the Ishibashi Cultural Center to the city of Kurume, his native place, for the purpose of rendering services to the public and promoting cultural development. The Museum (originally called “Ishibashi Art Gallery”) is the main institution of the Center. In 1971 the English name was changed from “Ishibashi Art Gallery” to “Ishibashi Museum of Art.” In 1977, thanks to a contribution of the bereaved family of Mr. Shōjirō Ishibashi, the building of the Museum was reconstructed and extended, and in April of the same year the Ishibashi Foundation was entrusted with the management of the Museum by the city of Kurume.

## ORGANIZATION & MANAGEMENT

### Ishibashi Foundation

(As of March 31, 1986)

<b>President of the Board of Directors</b>	Kanichirō Ishibashi			
<b>Directors</b>	Iichirō Hatoyama	Seiji Kaya	Akio Morita	Kazuhisa Arita
	Kenkichi Himuro	Hisashi Shintō	Yasuo Kamon	Tetsuo Taniguchi
<b>Auditors</b>	Masayuki Kitoku	Jirō Akashi	Takami Karasawa	
<b>Councillors</b>	Kanichirō Ishibashi	Bunkichirō Ryūtō	Susumu Uzawa	Kōichirō Ishii
	Seiji Kaya	Yukio Kobayashi	Yasuhiro Gō	Michiaki Kawakita
	Nobukazu Tani	Sankichi Asabuki	Kenkichi Himuro	Hiroshi Ishibashi
	Hisashi Shintō	Yoshirō Takasaki	Katsumi Yoshihisa	Kazuhisa Arita
	Osamu Hashiguchi	Shūji Takashina	Naoshi Tomobe	Yasuo Kamon
	Tetsuo Taniguchi	Hifumi Monji		

### Executive Committee of the Museums

<b>Chairman</b>	Kanichirō Ishibashi			
<b>Members</b>	Michiaki Kawakita	Nobukazu Tani	Sankichi Asabuki	Kazu Wakita
	Shūji Takashina	Naoshi Tomobe	Hiroshi Ishibashi	Yasuo Kamon
	Tetsuo Taniguchi			

### Administration

<b>Executive Secretary</b>	Hifumi Monji	<b>General Affairs Manager</b>	Senji Asahina
----------------------------	--------------	--------------------------------	---------------

### Bridgestone Museum of Art

<b>Councillor</b>	Sadajirō Kubo				
<b>Director</b>	Yasuo Kamon				
<b>Administrator</b>	Shinichi Ōsaki	<b>Chief Curator</b>	Nobuo Abe	<b>Curator</b>	Tatsuji Ohmori

### Ishibashi Museum of Art

<b>Director</b>	Tetsuo Taniguchi				
<b>Administrator</b>	Keiichirō Watanabe	<b>Chief Curator</b>	Masahiro Tauchi		



主な記録 ブリヂストン美術館  
《特別展示》

今月の名作——個人コレクションによる

東京の個人コレクターのご好意により、毎月2点ずつ所蔵作品を拝借し、第4室にて展示した。

1985年4月23日—5月30日

ギュスターヴ・モロー

《海からあがるヴィーナス》1886年/油彩/56×46cm

ジョヴァンニ・セガンティーニ

《虚栄》1897年/油彩/79.5×126.5cm

1985年6月1日—6月30日

カミーユ・ピサロ

《木を折る女》1890年/油彩/126×125cm

エドガー・ドガ

《挨拶する踊り子》1880年/テンペラ・パステル/61×43cm

1985年7月2日—7月30日

ジェームズ・アンソール

《仮面の中の自画像》1899年/油彩/120×80cm

ジェームズ・アンソール

《牡蠣を食べる女》1908年/油彩/145×110cm

1985年8月1日—8月29日

ジョアン・ミロ

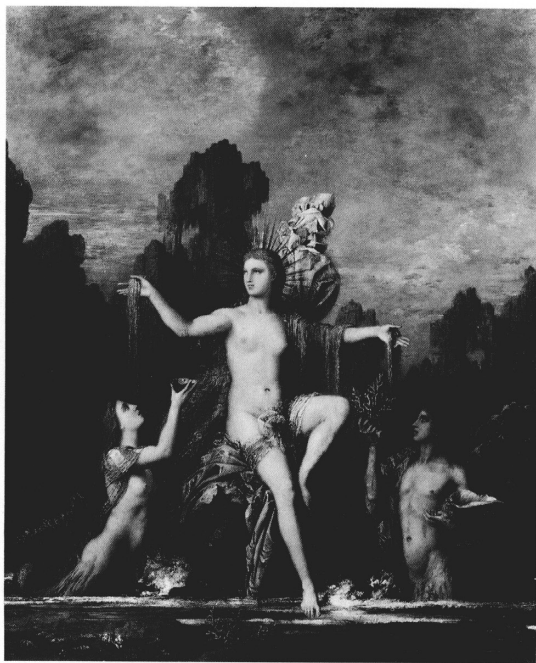
《農家の娘(マリア・シルアナ)》1916年/油彩/79×63.5cm

マルク・シャガール

《通りの中の花たち》1935年/油彩/90×117cm



会場

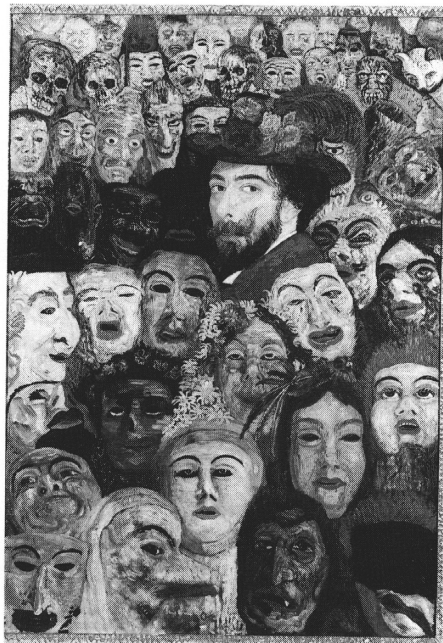


ギュスターヴ・モロー 《海からあがるヴィーナス》





ジョヴァンニ・セガンティーニ 《虚栄》



ジェームズ・アンソール 《仮面の中の自画像》



カミーユ・ピサロ 《木を折る女》



ジェームズ・アンソール 《牡蠣を食べる女》



《土曜講座》

通算回数	年	月日	講座題目	講師
			《第12回ギリシャの文化と美術—世界の美術館2》	
1384	1985年	4月6日	在日ギリシャ大使挨拶 ギリシャと私	三浦一郎氏
1385		4月13日	ヴァチカン美術館—ラオコーンの群像を中心に	森田義之氏
1386		4月20日	ローマ国立博物館—ヴィーナスの誕生	小川 照氏
1387		4月27日	ベルガモン美術館—ゼウス大祭壇の彫刻	関 隆志氏
1388		5月11日	ナポリ国立考古博物館—ポンペイの出土品から	青柳正規氏
1389		5月18日	アレクサンドリアのグレコ・ローマン美術館 —ヘレニズム美術の精華	友部 直氏
1390		5月25日	日本の美術館—ギリシャ陶器を中心に	水田 徹氏
			《世紀末から現代ヘーアート・ギャラリー〔現代世界の美術〕刊行記念》	
1391		6月8日	クリムト—ベートーヴェン・フリーズを中心として	中山公男氏
1392		6月15日	ムンク—生命のダンスをめぐって	長谷川三郎氏
1393		6月22日	ダリ—シュルレアリスムの奇才	岡田隆彦氏
1394		6月29日	クレー—自然との対話	千足伸行氏
1395		7月6日	ピカソ—身边を描き続けた革命画家	神吉敬三氏
1396		7月13日	ポロック—アメリカーナの神話	東野芳明氏
1397		7月20日	シャガール—愛と夢と…	黒江光彦氏
			《1400回記念講演会》	
1398		7月27日	制作の中から	佐藤忠良氏
1399		8月3日	制作の中から	岡本太郎氏
1400		8月10日	制作の中から	平山郁夫氏
			《ジャポネズリー研究会連続講演会—東と西の出会い—美術と建築》	
1401		9月7日	ロダンと日本	瀬木慎一氏
1402		9月14日	パリとブリュッセル—世紀末建築とジャポニスム	三宅理一氏
1403		9月21日	ジャポニスムの今日的意義—明治初年フランス人の日本美術観をめぐって	大島清次氏

通算回数	月日	講座題目	講師
		<b>《地中海学会連続講演会—美術と音楽Ⅱ》</b>	
1404	10月12日	「田園の音楽」への道——絵画・音楽・自然——	樺山紘一氏
1405	10月19日	楽器に見る天国と地獄——ボスの「快樂の園」を中心に——	神吉敬三氏
1406	10月26日	ギリシャの壺絵と音楽	片山千佳子氏
1407	11月2日	祝祭の演出家としての画家	若桑みどり氏
1408	11月9日	祝祭の中の音楽——ルネサンスの場合——	岸本宏子氏
1409	11月16日	神なき世の芸術——ロマン主義とピーターマイヤーの間——	喜多尾道冬氏
1410	11月23日	サロメからキリストへ——「画家マチス」をめぐる——	河村錠一郎氏
1411	11月30日	ワグネル主義と絵画の問題——ボードレールを 媒介にして——	饗庭孝男氏
		<b>《キリスト教世界と美術Ⅰ》</b>	
1412	12月7日	美術からみたイエスの生涯	松本富士男氏
1413	12月14日	近代絵画の中の聖書Ⅰ——ラファエル前派を中心に——	阿部信雄
1414	12月21日	近代絵画の中の聖書Ⅱ——ドラクロワからルオーまで——	島田紀夫氏
1415	1986年 1月11日	絵画にみる聖書理解——忘れられた画家 コンラート・ヴィッツ——	海津忠雄氏
1416	1月18日	旧約の預言者像——システイーナ礼拝堂の ミケランジェロ——	若桑みどり氏
1417	1月25日	聖母の都市シエナ——中世末の都市国家と美術——	石鍋真澄氏
		<b>《都市と美術》</b>	
1418	2月8日	北方の栄光——ヘントとファン・アイク兄弟——	嘉門安雄
1419	2月15日	パリの印象派そして/あるいは印象派のパリ——	島田紀夫氏
1420	2月22日	バルセローナ——ガウディ、ピカソ、ミロ……	中山公男氏
1421	3月1日	アントワープ——ブリューゲルの世紀——	森 洋子氏
1422	3月8日	初期キリスト教美術の町ラヴェンナ——その建築と モザイク——	松島道也氏
1423	3月15日	庭園のローマ——16世紀のヴィラの庭——	横山 正氏
1424	3月22日	ボンベイ——美術館としての都市——	青柳正規氏
1425	3月29日	フェルメールの街デルフト——静謐と秩序——	高橋達史氏



## 《博物館学実習生の受入れ》

学芸員資格取得のための博物館学実習生を次のように受入れた。

期間：1985年7月16日より9月15日（ただし、休館日、8月13日—8月19日は除く）

1986年2月11日より2月23日（ただし、休館日は除く）

人数：12校 93名

実習内容

	10：30—12：30	13：30—15：00	15：20—17：00
第1日(火)	ブリヂストン美術館の概要	美術館内見学	美術館活動の実際
第2日(水)	保存と展示	作品の現状調査	実習ノート整理
第3日(木)	図書資料の整理について	図書資料の整理(作業)	作品台帳について 作品写真の管理
第4日(金)	他館自由見学(都内) (交通費、入場料等自己負担)	他館との比較レポート作成、及び実習ノート整理	
第5日(土)	普及・教育活動について (VTR 視聴)	土曜講座聴講、あるいは作品解説作成	
第6日(日)		(14：00より) まとめ、実習ノート整理	

なお、研修生としてそごう美術館学芸員2名を1985年6月26日より7月20日まで受入れた。

## 《1985年度新収図書》

	購入	寄贈	計
和書	30冊	59冊	89冊
洋書	108冊	17冊	125冊
計	138冊	76冊	214冊

(\* 展覧会図録・逐次刊行物は含まない)

# 主な記録 石橋美術館

## 《特別展》

生誕百年記念

### 松田諦晶展

1985年10月19日(土)―11月24日(日)(月曜休館/33日間)

主催：石橋財団石橋美術館/久留米市/西日本新聞社

出品内容：油彩115点、水彩2点、色鉛筆等4点 計121点

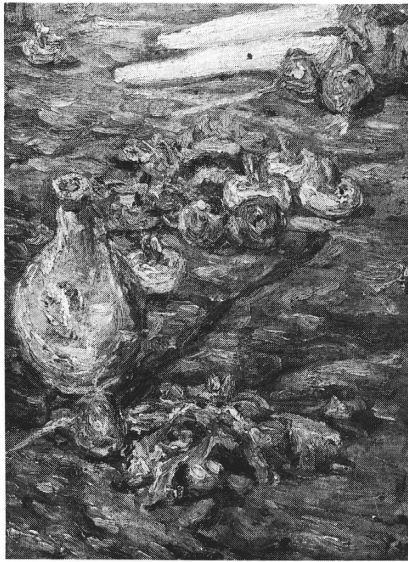
入場者総数：8,351人

1. 雪景(篠山城跡より見たる) 色鉛筆,紙/25.0×35.2cm/1907年
2. 虹の松原にて(唐津) 色鉛筆,紙/21.0×31.5cm/1907年
3. 井戸端静物(徳利 大根 根蕪) 油彩,板/32.0×22.9cm/1910年
4. 晩春の陽(眼鏡橋) 油彩,画布/44.2×32.2cm/1910年
5. 耆岐の赤瀬 油彩,画布/70.5×115.0cm/1910年
6. 海景 油彩,画布/39.6×51.0cm/1910年頃
7. 芍薬畑(篠山神社) 油彩,画布/33.3×45.7cm/1911年
8. 春野の二少年(佐野敏一 古賀亀雄) 油彩,板/23.6×33.0cm/1911年
9. 白衣の少年(弟茂介) 油彩,板/32.6×22.8cm/1911年
10. 櫓と粟殻積 油彩,板/23.0×33.0cm/1912年
11. 櫓畑 油彩,画布/60.8×94.0cm/1913年
12. 晩春の村(淵ノ上風景) 油彩,画布/84.2×71.2cm/1913年
13. 麦播く頃(櫓と耕作人) 油彩,画布/72.8×91.0cm/1913年
14. 刈跡(東京大塚にて) 油彩,画布/51.8×71.0cm/1914年
15. 櫓紅葉(乙羽護国寺) 油彩,画布/72.8×91.0cm/1914年
16. 水車小屋(嬉野) 油彩,画布/49.0×66.0cm/1915年
17. 自画像 油彩,板/31.3×23.2cm/1915年
18. 尾花 油彩,板/23.2×33.0cm/1916年
19. げんげ畑の農夫 油彩,画布(板に貼付)/23.5×32.5cm/1917年
20. 冬風景(櫓と麦畑) 油彩,画布/48.5×63.3cm/1919年
21. 子牛の群 油彩,画布/53.2×73.0cm/1919年
22. 赤牛の首(前向) 油彩,板/33.0×23.3cm/1919年
23. 自画像(ラッコ帽の) 油彩,画布/45.2×37.9cm/1919年
24. 芥子の花(国分にて) 油彩,画布/51.0×67.2cm/1920年
25. 夏の庭園 油彩,画布/60.6×72.8cm/1920年
26. 樹蔭水泳 油彩,画布/60.6×72.5cm/1920年
27. 大根干ある櫓紅葉 油彩,画布/60.5×72.3cm/1920年
28. 長谷山水 油彩,画布/37.8×45.5cm/1921年
29. 落陽 油彩,キャンヴァスボード/23.6×32.8cm/1921年
30. 酒盛 油彩,画布(ボードに貼付)/26.3×31.9cm/1922年
31. 鐘ヶ岬風景 油彩,画布/50.0×60.3cm/1922年
32. 鐘ヶ岬風景(藁家と松) 油彩,画布/50.2×61.0cm/1922年
33. コンポジション 油彩,画布/61.0×71.2cm/1922年
34. 竹藪を貫通せる新道 油彩,画布/33.0×45.5cm/1923年
35. 奈多風景 油彩,画布/45.4×53.0cm/1923年
36. 自画像(白衣の) 油彩,板/32.0×22.5cm/1924年
37. 地形搦き 油彩,画布/53.0×45.5cm/1925年
38. 髪を洗う女 油彩,画布/73.0×61.0cm/1925年
39. 初冬風景(棕森と大根畑農夫) 油彩,画布/60.4×72.4cm/1925年
40. 夏雲(筑後川宮の陣橋下流) 水彩,紙/25.9×33.2cm/1926年
41. 高良川の一眼鏡橋 油彩,画布/45.5×53.4cm/1926年

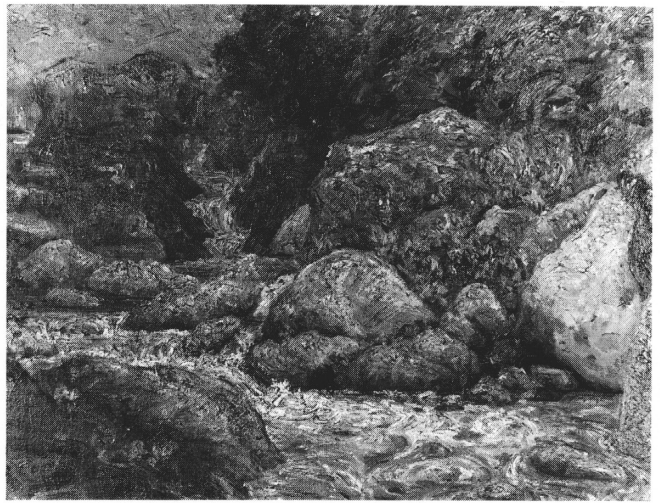
42. 馬を洗う 油彩, 画布/54.2×80.0cm/1927—51年
43. 水浴(母と子) クレヨン, 色鉛筆, 紙/25.0×34.0cm/1928年頃
44. 野菜果物 油彩, 画布/60.5×72.7cm/1928年
45. 静物(海蟹とジャコ等) 油彩, キャンヴァスボード/23.6×32.4cm/1928年
46. 草花 油彩, 画布/53.0×72.5cm/1929年
47. 小菊静物 油彩, 画布/45.3×52.9cm/1929年
48. 自画像 油彩, 板/32.5×23.8cm/1929年
49. 篠山城趾の桜 油彩, 画布/37.2×45.4cm/1930年
50. 桜のある風景 油彩, 画布/40.5×52.2cm/1930年頃
51. 緑蔭高良川女人群 油彩, 画布/73.0×90.5cm/1930年
52. 七夕髪洗う女 油彩, 画布/45.6×53.0cm/1931年
53. 吉村大蔵肖像 油彩, 画布/60.0×45.4cm/1931年
54. 吉村ヌイ肖像 油彩, 画布/60.0×45.1cm/1931年
55. 吉村理一郎肖像 油彩, 画布/60.0×45.4cm/1931年
56. 松尾庄之助肖像 油彩, 画布/91.0×65.2cm/1932年
57. 緑蔭休息 油彩, 画布/53.2×71.4cm/1933年
58. 緑蔭娘二人 油彩, 画布/73.0×90.8cm/1933年
59. 樹蔭納涼 油彩, 画布/61.0×72.8cm/1933年
60. 今宿海岸暮色 油彩, 画布/37.8×45.5cm/1934年
61. 耕す(東櫛原) 油彩, キャンヴァスボード/31.0×39.6cm/1934年
62. 吉村アイ肖像 油彩, 画布/60.4×45.2cm/1934年
63. 柿 油彩, 画布/38.2×45.5cm/1935年
64. 少年水泳 油彩, キャンヴァスボード/31.8×40.6cm/1935年
65. 高良川風景(櫛新緑) 油彩, キャンヴァスボード/32.0×40.6cm/1935年
66. 裸婦(緑蔭横臥) 油彩, 画布/33.5×45.0cm/1935年
67. 裸婦(横たわる) 油彩, キャンヴァスボード/31.5×44.2cm/1935年
68. 洗濯女 油彩, キャンヴァスボード/24.0×32.6cm/1935年
69. 橋詰又三郎肖像 油彩, 画布/60.0×45.0cm/1936年
70. 橋詰トモエ肖像 油彩, 画布/60.0×44.8cm/1936年
71. 銃後 油彩, 画布/90.6×116.0cm/1937年
72. 洗濯婦 油彩, 画布/72.5×91.0cm/1940年
73. 野の午餐 油彩, キャンヴァスボード/31.8×40.6cm/1940年
74. 野の午餐 油彩, 画布/61.0×73.0cm/1940年
75. 慈恩の滝 油彩, 画布/48.4×54.2cm/1942年
76. 収穫 油彩, 画布/60.5×72.5cm/1942年
77. 伯耆大山 油彩, 画布/38.0×45.5cm/1943年
78. 伯耆大山 油彩, 画布/41.2×53.2cm/1943年
79. 鶴子肖像 鉛筆, 画布/60.4×50.0cm/1947年
80. 玉葱 油彩, キャンヴァスボード/31.5×40.8cm/1948年
81. 静物(南瓜 華果 玉葱) 油彩, 画布/34.2×53.4cm/1948年
82. 皿のトマト 油彩, 画布/37.8×45.5cm/1948年
83. 柘榴静物 油彩, 画布/27.2×41.1cm/1948年
84. 収穫(穂屑を篩う) 油彩, 画布/60.5×49.5cm/1948—49年
85. 山羊 油彩, ベニヤ板/72.4×90.2cm/1949年
86. 山羊 油彩, 画布/65.0×80.5cm/1949年
87. 静物栄螺 油彩, ダンボール/27.6×35.2cm/1949年
88. 櫛紅葉 油彩, 画布/46.0×53.2cm/1949年
89. 高良山暮色 油彩, 画布/37.6×45.5cm/1949年
90. 冬の晨(野中町) 油彩, キャンヴァスボード/37.7×45.4cm/1949年



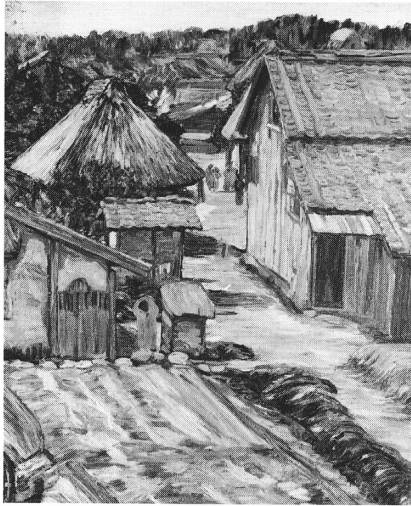
91. 桃 油彩,キャンヴァスボード/32.0×32.0cm/1950年
92. 秋風景(野中町) 油彩,キャンヴァスボード/41.0×32.0cm/1950年
93. 吉村貞隆肖像 油彩,画布/53.0×45.8cm/1950年
94. 急須 油彩,画布/32.5×32.6cm/1951年
95. 古時計 油彩,キャンヴァスボード/33.0×33.0cm/1951年
96. 八重樺 油彩,画布/38.0×45.3cm/1951年
97. 花のトンネル 油彩,画布/45.5×53.0cm/1951年
98. 緑蔭(朝妻の洗濯婦群) 油彩,画布/52.5×45.2cm/1951年
99. 緑蔭鞆遊び 油彩,画布/45.4×52.6cm/1951年
100. 水天宮神苑 油彩,画布/45.0×52.0cm/1951年
101. 収穫 油彩,画布/60.4×72.2cm/1951年
102. 放水路冬景色 水彩,紙/31.0×47.3cm/1951年
103. 自画像 油彩,画布/42.6×30.6cm/1953年
104. 李花風景(御井町) 油彩,画布/53.2×72.6cm/1953年
105. 向日葵 油彩,画布/65.2×53.0cm/1953年
106. 枯れたる向日葵 油彩,画布/52.5×41.0cm/1953年
107. 初冬風景(藤山) 油彩,画布/33.8×45.5cm/1953年
108. 枯尾花 油彩,キャンヴァスボード/37.4×44.6cm/1953年
109. 壺紅葉(藤山) 油彩,画布(ボードに貼付)/33.2×53.0cm/1953年
110. 壺紅葉 油彩,画布/40.8×53.0cm/1953年
111. 桜風景(淵ノ上) 油彩,キャンヴァスボード/24.5×33.0cm/1955年
112. 山桜(荒木納骨堂前) 油彩,画布/45.6×65.2cm/1956年
113. 静物(花蓮上のトマト) 油彩,画布/31.0×39.0cm/1956年
114. 菊 油彩,画布/53.0×72.5cm/1956年
115. 菊 油彩,画布/53.0×65.2cm/1956年
116. 静物(薔薇) 油彩,画布/37.8×45.5cm/1957年
117. 梅林寺開山堂 油彩,キャンヴァスボード/23.8×32.6cm/1958年
118. 梅林寺外苑 油彩,キャンヴァスボード/24.0×33.4cm/1958年
119. 篠山城跡(西南より見たる) 油彩,画布/33.5×53.2cm/1958年
120. 錫銚子と柘榴 油彩,画布/23.4×32.6cm/1959年
121. 田植え時 油彩,画布/130.5×162.7cm/1960年



3



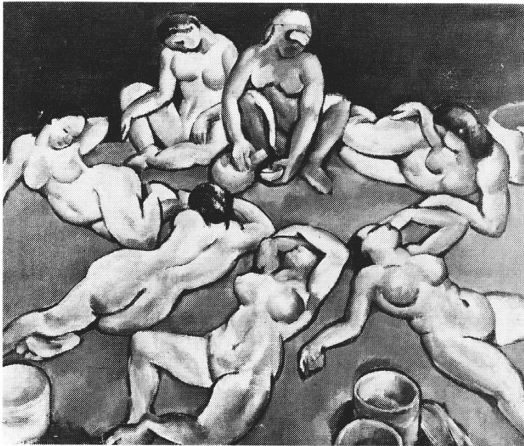
6



12



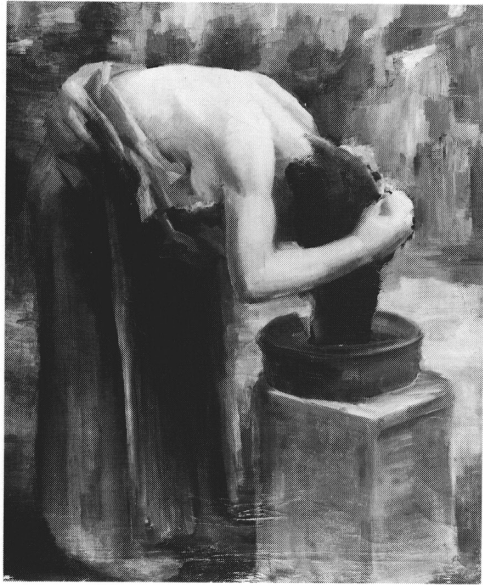
23



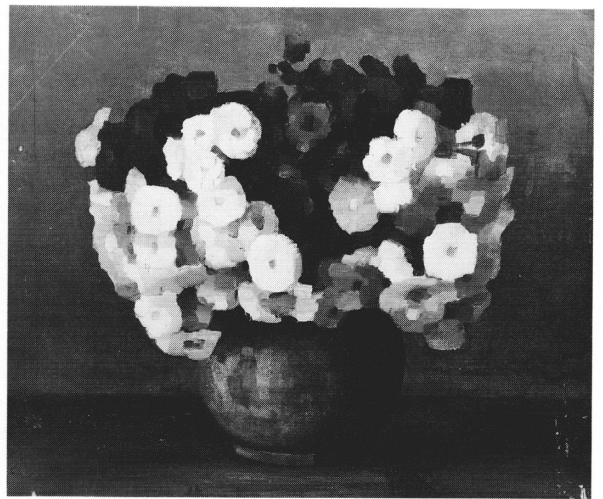
33



35



38



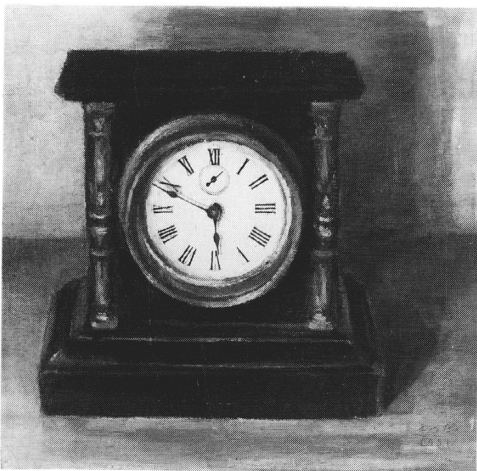
47



60



86



95



115



---

《特別展示》

---

青木繁・デッサン（写生帖）

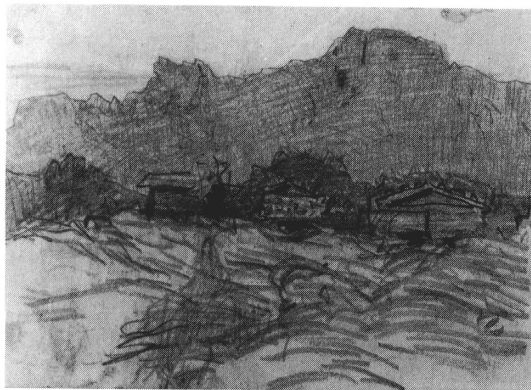
1985年4月27日（土）—5月26日（日）

（月曜休館/28日間/石橋美術館常設展に併設）

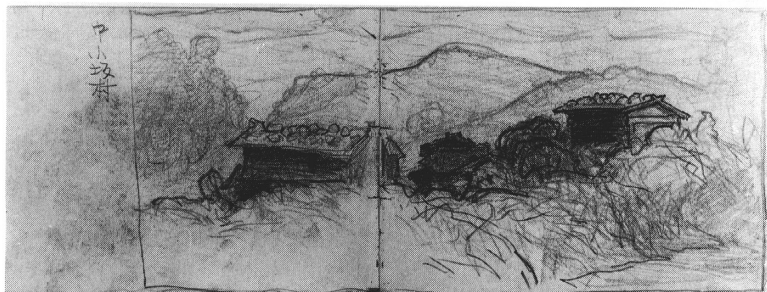
---

1. 汗の妙義山スケッチ行 鉛筆, 淡彩, 紙/14.5×19.0×2枚/1902年
2. 麓より妙義山を望む 鉛筆, 紙/14.5×19.0×2枚/1902年
3. 男の顔戯画 鉛筆, 淡彩, 紙/14.6×19.0cm/1902年
4. 中小坂村 鉛筆, 紙/14.7×19.1×2枚/1902年
5. スケッチする男 鉛筆, 紙/15.4×23.9cm/1902年
6. 越後獅子 鉛筆, 淡彩, 紙/14.5×19.1cm/1902年
7. 山上のスケッチ 鉛筆, 紙/19.1×14.5cm/1902年
8. 妙義山金洞第一石門 鉛筆, 淡彩, 紙/19.1×14.6×2枚/1902年
9. 馬肉屋 鉛筆, 淡彩, 紙/14.5×19.1cm/1902年
10. 信州甘菜川のスケッチ 鉛筆, 淡彩, 紙/19.2×14.4cm/1902年
11. 籠をせおった男 鉛筆, 紙/19.2×15.2cm/1902年
- 12-1. 絵かるた(小野小町) 水彩, 紙/8.7×6.0cm/1904年
- 12-2. 絵かるた(在原業平) 水彩, 紙/8.7×6.0cm/1904年
- 12-3. 絵かるた(紫式部) 水彩, 紙/8.7×6.0cm/1904年
- 13-1. 絵かるた(文字のない) 水彩, 紙/8.7×6.0cm/1904年
- 13-2. 絵かるた(文字のない) 水彩, 紙/8.7×6.0cm/1904年
14. 女(しおり) 墨, インク, 紙/8.8×6.0cm/1904年
15. 男の顔 鉛筆, 淡彩, 紙/7.5×5.7cm/1904年
16. 自画像 鉛筆, 紙/18.5×11.0cm/1904年
17. 眼 コンテ, 紙/18.5×11.0cm/1904年
18. 帰漁を待つ母子 鉛筆, 色鉛筆, 紙/14.7×13.5cm/1904年
19. 門壁のある風景 鉛筆, 紙/14.5×23.0cm/1904年
20. 門壁の図案 鉛筆, 淡彩, 紙/14.5×23.0×2枚/1905—06年頃
21. 人物群像 鉛筆, 墨, 紙/15.0×22.2cm/1905—06年頃
22. 菊籬 鉛筆, 淡彩, 紙/19.0×28.7cm/1909—10年頃
23. 風景 鉛筆, 淡彩, 紙/19.2×28.8cm/1910年
24. 山村風景 鉛筆, 淡彩, 紙/17.8×11.0cm/1910年
25. 湯祭 鉛筆, 淡彩, 紙/18.1×11.0cm/1910年
26. 橋のある風景 鉛筆, 淡彩, 紙/18.0×11.1cm/1910年
27. 山あいの風景 鉛筆, 淡彩, 紙/17.9×11.1cm/1910年
28. 明治の女 鉛筆, 淡彩, 紙/18.0×11.1cm/1910年

※寸法(タテ×ヨコcm)は紙の大きさを測定したものである。



2



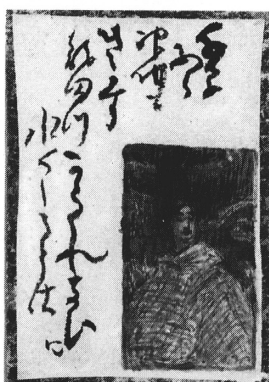
4



8



12-1



12-2



12-3

《美術講座》

月 日	演 題	講 師
1985年 10月6日	私と現代美術(素材と表現)	楠 本 正 明 桑 山 忠 明
10月19日	松田諦晶の作品について	橋 富 博 喜
10月26日	松田諦晶と筑後画壇	古 川 智 次
11月2日	松田諦晶に学ぶこと	藤 田 吉 香
1986年 1月25日	都市空間と彫刻	増 田 洋
3月30日	'86多様性の構築シンポジウム	藤 井 雅 美

《1985年度新収図書》

	購 入	寄 贈	計
和書	63冊	274冊	337冊
洋書	8冊	0冊	8冊
計	71冊	274冊	345冊



# 1985年度入場者数

## ブリヂストン美術館

月	開館 日数	有料					無料	総計	一日平均
		一般	大・高生	中・小生	団体	合計			
4	25	3,059	585	294	295	4,233	99	4,332	173
5	27	4,279	1,324	255	668	6,526	112	6,638	246
6	26	3,894	836	150	579	5,459	123	5,582	215
7	26	3,473	1,073	459	590	5,595	95	5,690	219
8	27	4,581	1,574	1,790	329	8,274	139	8,413	312
9	25	2,970	751	261	617	4,599	51	4,650	186
10	27	2,922	674	184	652	4,432	103	4,535	168
11	26	2,878	710	158	631	4,377	74	4,451	191
12	22	1,861	462	124	176	2,623	43	2,666	121
1	22	2,361	527	155	453	3,496	59	3,555	162
2	24	3,063	704	214	384	4,365	52	4,417	184
3	26	3,339	869	363	311	4,882	77	4,959	191
合計	303	38,680	10,089	4,407	5,685	58,861	1,027	59,888	198

## 石橋美術館

月	開館 日数	有料					無料	総計	一日平均
		一般	大・高生	中・小生	団体	合計			
4	26	1,884	132	213	689	2,918	78	2,996	115
5	28	3,034	210	298	2,701	6,243	344	6,587	235
6	26	1,629	84	73	1,410	3,196	111	3,307	127
7	26	1,226	85	182	476	1,969	102	2,071	80
8	27	2,269	258	460	386	3,373	72	3,445	128
9	27	2,339	144	206	1,423	4,112	129	4,241	157
10	23	2,134	79	199	4,700	7,112	594	7,706	335
11	24	2,219	60	132	2,635	5,046	882	5,928	247
12	23	736	112	35	575	1,458	59	1,517	66
1	23	989	60	57	445	1,551	76	1,627	71
2	24	1,694	101	125	539	2,459	118	2,577	107
3	26	1,661	155	187	864	2,867	144	3,011	116
合計	303	21,814	1,480	2,167	16,843	42,304	2,709	45,013	149

## 新収蔵作品 New Acquisitions

ゴーガン, ポール

**GAUGUIN, Paul**

1848—1903

### 馬の頭部のある静物

1886年頃

油彩・画布, 49×38cm

右下に署名: *Paul Gauguin*

### Still Life with Horse's Head

c. 1886

Oil on canvas, 49×38cm

Signed lower right: *Paul Gauguin*

来歴 Prov.: Hjalmar Gabrielson; S. Lindquist; Private collection, Paris; Private collection, Switzerland; C. Kaupa, Karlsruhe; acquired by the Museum, March 1986

展覧会歴 Exh.: *Der Japonismus in der Malerei und Graphik des 19. Jahrhunderts*, Haus am Waldsee, Berlin, 1965, cat. no. 37; *Neo-Impressionism*, The Solomon R. Guggenheim Museum, New York, 1967, cat. no. 113; *Mutual Influences between Western and Japanese Arts*, The National Museum of Modern Art, Tokyo, 1968; *Weltkulturen und moderne Kunst. Die Begegnung der europäischen Kunst und Musik im 19. und 20. Jahrhundert mit Asien, Afrika, Ozeanien, Afro- und Indo-Amerika*, Haus der Kunst, Munich, 1972, cat. no. 649; *Post-Impressionism: Cross-Currents in European Painting*, Royal Academy of Arts, London, 1979-80, cat. no. 80

文献 Bibl.: Georges Wildenstein, *Gauguin*, I, catalogue, Paris, 1965, no. 183; Leopold Reidemeister, *Der Japonismus in der Malerei und Graphik des 19. Jahrhunderts* (exh.

cat.), Haus am Waldsee, Berlin, 1965, pp. 30-31; William M. Kane, "Gauguin's *Le Cheval Blanc*: Sources and Syncretic Meanings," *Burlington Magazine*, July 1966, pp. 355-56, pl. 33; Jay Martin Kloner, *The Influence of Japanese Prints on Edouard Manet and Paul Gauguin*, Ph. D. dissertation, Columbia University, 1968, pp. 145-46; Robert L. Herbert, *Neo-Impressionism* (exh. cat.), The Solomon R. Guggenheim Museum, New York, 1968, p. 154, no. 113; Alan Bowness, *Gauguin*, London, 1971, 1972 (2nd ed.), pp. 5-6, pl. 4; Frank Whitford, *Japanese Prints and Western Painters*, London, 1977, p. 172; Clive Bell, *The French Impressionism*, Oxford, 1951, 1978 (3rd ed.), pl. 25; Vojtech Jirat-Wasiutynski, *Paul Gauguin in the Context of Symbolism*, New York-London, 1978, pp. 41-43, pl. 18; *Post-Impressionism: Cross-Currents in European Painting* (exh. cat.), Royal Academy of Arts, London, 1979, p. 72, no. 80; Klaus Berger, *Japonismus in der westlichen Malerei 1860-1920*, Munich, 1980, p. 151, pl. 104; G.M. Sugana, *Tout l'œuvre peint de Gauguin* (Les Classiques de l'Art), French edition brought up to date by Marie-Paule Durand, Paris, 1981, no. 480; 池上忠治他『浮世絵と西洋近代絵画』(週刊朝日百科世界の美術14), 朝日新聞社, 1978, 6: 101頁

保管: ブリヂストン美術館

Managed by Bridgestone Museum of Art (Tokyo)

サカイ, カスヤ

**SAKAI, Kasuya**

1927—

### 作品 No. 80

1962年

油彩・コラージュ・画布, 89×116cm

左下に署名と年記: *Sakai, 62*

### Painting No. 80 (*Pintura numero 80*)

1962

Oil and collage on canvas, 89×116cm

Signed and dated lower left: *Sakai, 62*

来歴 Prov.: アルゼンチン共和国政府寄贈(donated by the Argentine Government)

保管: ブリヂストン美術館

Managed by Bridgestone Museum of Art (Tokyo)

サカイ・カスヤ《作品 No. 80》



ポール・ゴーガン《馬の頭部のある静物》

---

グロス, ゲオルグ

**GROSZ, George**

1893—1959

**プロムナード**

1926年

油彩・画布, 100×126cm

裏面に署名および〈1919〉と〈1926〉の年記

(これは1919年にグロスによって描かれた縦長の作品の上に1926年に新たに制作された横長の作品)

**Promenade**

1926

Oil on canvas, 100×126cm

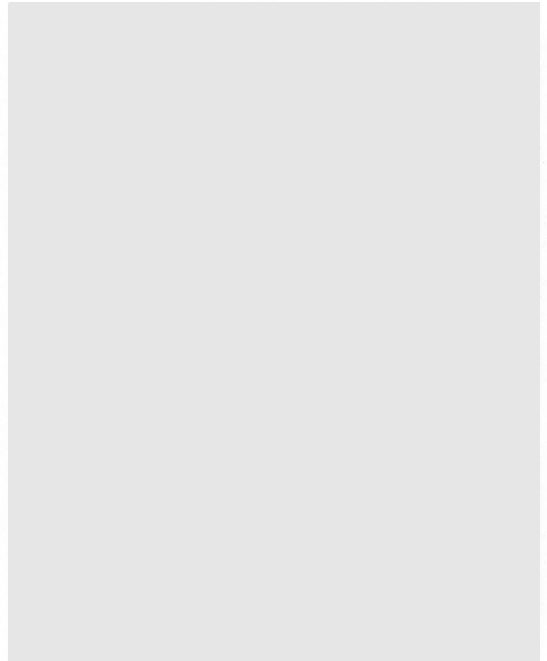
Signed and dated twice (1919 and 1926) on the reverse

(This is a painting done in 1926 over an earlier vertical painting by George Grosz in 1919.)

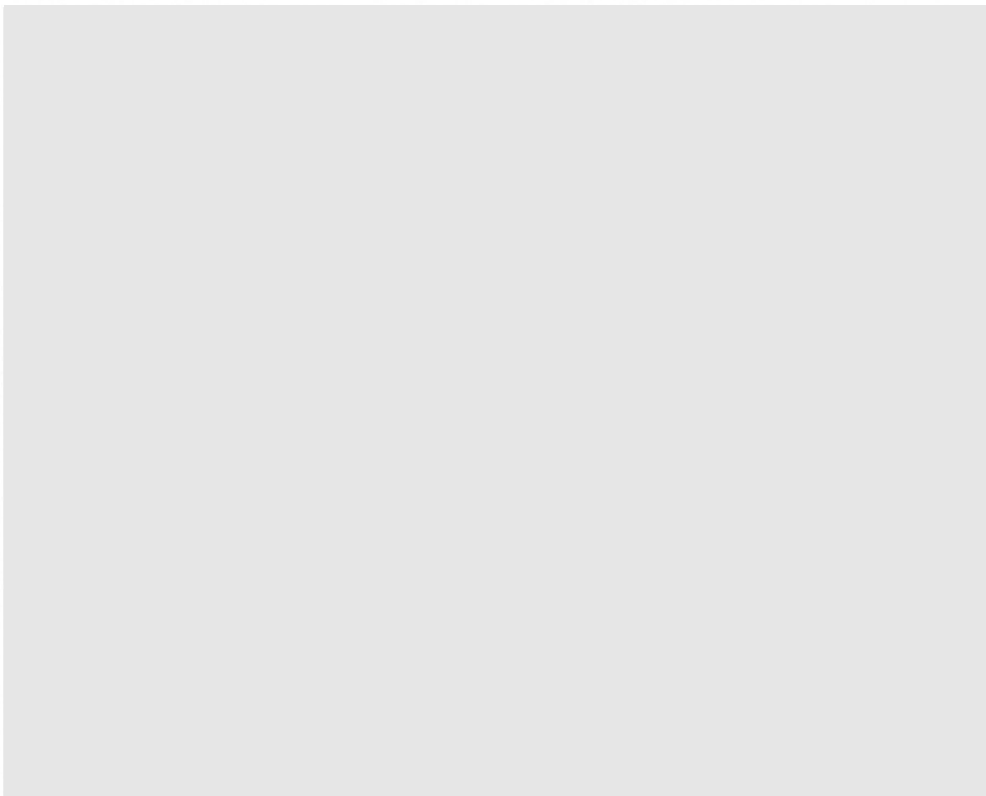
来歴 Prov.: Galerie Alfred Flechtheim, Berlin; Erwin Blumenfeld, Amsterdam; Private collection, U.S.A.; Fuji Television Gallery, Tokyo; acquired by the Museum, 1985  
展覧会歴 Exh.: *George Grosz*, Brussels, 1932

保管: ブリヂストン美術館

*Managed by Bridgestone Museum of Art (Tokyo)*



《プロムナード》のX線写真



ゲオルグ・グロス《プロムナード》



東谷武美

AZUMAYA, Takemi

1948—

日蝕 M

1985年

リトグラフ, 50.0×68.7cm

Solar Eclipse M

1985

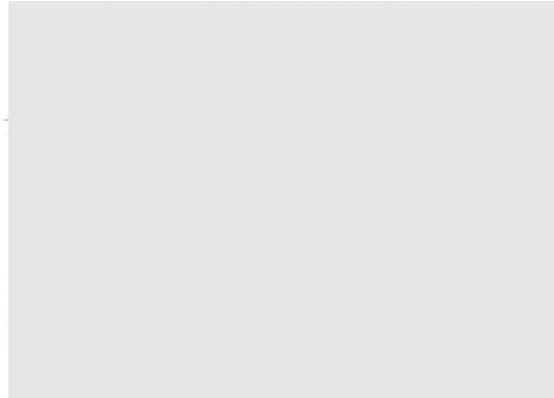
Lithograph, 50.0×68.7cm

来歴 Prov.: 作者寄贈 (donated by the Artist)

保管: プリヂェストン美術館

Managed by Bridgestone Museum of Art (Tokyo)

東谷武美《日蝕M》



若月公平

WAKATSUKI, Kohei

1956—

Removed~Ⅴ~△

1985年

エッチング・アクアティント, 55.0×83.0cm

Removed~Ⅴ~△

1985

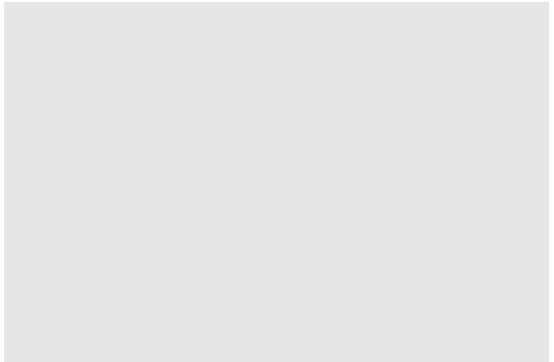
Etching and aquatint, 55.0×83.0cm

展覧会歴 Exh.: 「第17回現代日本美術展」東京都美術館, 京都市美術館, 1985, プリヂェストン美術館賞受賞

保管: プリヂェストン美術館

Managed by Bridgestone Museum of Art (Tokyo)

若月公平《Removed~Ⅴ~△》



## 古賀春江

### KOGA, Harue

1895—1933

#### 無題

油彩・画布, 72.5×72.5cm

#### Untitled

Oil on canvas, 72.5×72.5cm

来歴 Prov.: 福岡, 個人 (Private collection, Fukuoka)

展覧会歴 Exh.: 「近代洋画を築いた50人」福岡県文化会館, 1973;  
「古賀春江回顧展」福岡県文化会館, 1975, no. 54; 「古賀春江展」  
大牟田, いづみ画廊, 1981, no.8

文献 Bibl.: 『近代の美術36 古賀春江』至文堂, 1976, 図版4

保管: 石橋美術館

Managed by Ishibashi Museum of Art (Kurume)



古賀春江《無題》

## 古賀春江

### KOGA, Harue

1895—1933

#### 資料(スケッチブック・下絵・ノートなど)

#### Sketchbooks, sketches, notebooks, etc.

来歴 Prov.: 東京, 高松家(Takamatsu, Tokyo)

#### スケッチブック 30冊

1. 1912年9～10月
2. 1912年11～12月
3. 1913年4～5月
4. 1913年6月
5. 1913年8月
6. 1913年8～10月
7. 1913年11～12月?
8. 1914年4～7月
9. 1914年9～12月
10. 1915年1～3月
11. 1915年7～12月
12. 1917年
13. 1917年8月
14. 1917年頃
15. 1918年頃

16. 1922年頃
  17. 1922年7～8月
  18. 1922年8～11月
  19. 1923年頃
  20. 1923年
  21. 1925年頃
  22. 1925～26年
  23. 1927年
  24. 1928年頃～1932年頃
  25. 1931年頃
  26. 1933年
- その他年代未詳 4冊

#### 作品下絵

1. 無題  
鉛筆・紙 24.0×33.3cm 1929年
2. 美貌なる虚無  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm 1930年
3. 彎曲せる眼鏡  
鉛筆・紙 29.3×18.9cm 1930年
4. 現実線を切る主智的表情  
鉛筆・紙 25.0×34.2cm 1931年
5. 花野原  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm 1932年
6. 音のない昼の夢(月夜の鳥)  
鉛筆・紙 33.0×24.0cm 1932年
7. 音のない昼の夢  
鉛筆・紙 33.0×24.0cm 1932年

8. 散歩  
鉛筆・紙 24.2×33.0cm
9. そこに在る  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm 1933年
10. 深海の情景  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm 1933年
11. 楽しき饗宴  
鉛筆・紙 24.3×33.0cm 1933年
12. 文化は人間を妨害する  
鉛筆・紙 33.6×24.4cm 1933年
13. 文化は人間を妨害する  
鉛筆・紙 33.6×24.4cm 1933年
- 他多数

#### 表紙(挿絵)下絵など

1. 片岡鉄兵『女性讃』表紙  
水彩・紙 28.0×26.5cm 1930年
2. 龍胆寺雄『放浪時代』表紙  
水彩・紙 24.5×18.0cm 1930年
3. 菊池寛『有憂華』箱絵  
鉛筆・墨・紙 24.5×32.5cm 1931年
4. 菊池寛『有憂華』表紙  
鉛筆・紙 29.0×22.0cm 1931年
5. 竹中久七『餘技』表紙  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm 1933年
6. 檻(『東京バック』表紙)  
水彩・紙 30.0×22.8cm 1929年
7. 『詩神』表紙のためのデザイン  
鉛筆・水彩・紙 29.3×21.0cm 1930年頃

8. 『旗魚』6～8号表紙  
鉛筆・インク・紙 31.6×22.2cm 1930年
9. デッサン  
鉛筆・紙 24.2×33.2cm 1931年頃
10. ロボットも微笑む(『東京バック』裏表紙)  
鉛筆・紙 33.5×24.4cm 1931年
11. 『香蘭』9巻7号～12号表紙  
墨・水彩・紙 32.5×24.1cm 1931年
12. 冬(『コードモノクニ』挿絵)  
鉛筆・紙 24.3×33.0cm 1931年
13. 『週刊朝日』表紙のためのデザイン  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm 1933年頃
14. 春のドライブ(『週刊朝日』表紙)  
鉛筆・紙 38.5×26.3cm 1933年
15. 春のドライブ(『週刊朝日』表紙)  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm 1933年
16. 街頭の初夏(『週刊朝日』表紙)  
水彩・紙 38.0×21.0cm 1933年
17. 模写(『精神病者の絵画』より)  
鉛筆・紙 24.3×33.6cm
18. 模写(『精神病者の絵画』より)  
鉛筆・紙 24.3×33.6cm
- 他多数

#### ノート 12冊

1. 1917年頃 講義ノート
2. 1923年頃
3. 1923年

4. 1923年頃～1926年
5. 1923年～1930年
6. 1930年～1932年
7. 1933年
8. 夢二模写
9. 住所録
- その他 3冊

保管：石橋美術館  
Managed by Ishibashi Museum  
of Art (Kurume)

#### 松田諦晶(実)

#### MATSUDA, Teisho (Minoru)

1886—1961

#### 伯耆大山

1943年

油彩・画布 41.0×53.0cm

左下に署名・年記：まつだ。1943。  
裏面ラベルに題名・制作年など

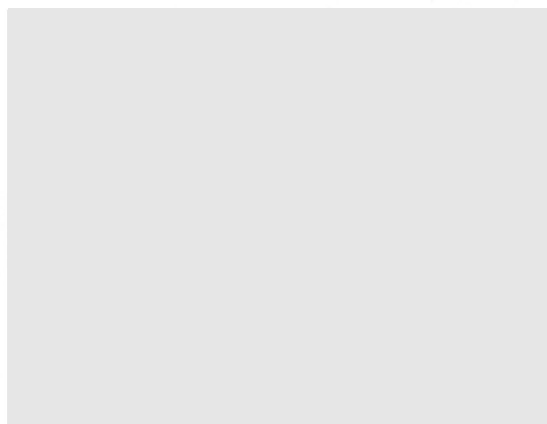
#### Mt. Daisen

1943

Oil on canvas, 41.0×53.0cm  
Signed and dated lower left,  
entitled and dated on back seal

来歴 Prov.: 松田茂介氏寄贈 (donated by M. Matsuda)

保管：石橋美術館  
Managed by Ishibashi Museum of Art (Kurume)



松田諦晶《伯耆大山》

坂本繁二郎

SAKAMOTO, Hanjiro

1882—1969

日本風景版画第六集 筑紫之部

1918年

木版 全5葉および表紙

表紙

14.6×17.0cm(紙面:34.6×28.0cm)

榎寺神社

17.4×23.5cm(紙面:18.6×26.6cm)

神湊

17.0×23.5cm(紙面:18.4×26.1cm)

水繩山

17.0×23.5cm(紙面:18.3×26.2cm)

筑後川

16.9×23.2cm(紙面:18.2×26.3cm)

火の海

17.0×23.4cm(紙面:18.3×26.5cm)

Japan Landscape, Tsukushi

1918

Woodcuts

Cover

14.6×17.0cm(sheet:34.6×28.0cm)

Enokidera Shrine

17.4×23.5cm(sheet:18.6×26.6cm)

Ko-no-minato

17.0×23.5cm(sheet:18.4×26.1cm)

Mt. Mino

17.0×23.5cm(sheet:18.3×26.2cm)

Chikugo River

16.9×23.2cm(sheet:18.2×26.3cm)

Sea of Fire (Shiranui)

17.0×23.4cm(sheet:18.3×26.5cm)

来歴 Prov.: 画廊さかもと(Galerie Sakamoto)

文献 Bibl.: 『坂本繁二郎作品全集』朝日新聞社, 1970, 図版18—22; 『坂本繁二郎全版画集』形象社, 1980; 『増補・坂本繁二郎作品全集』朝日新聞社, 図版142—146

保管: 石橋美術館

Managed by Ishibashi Museum of Art (Kurume)

坂本繁二郎《日本風景版画 第六集 筑紫之部》〈表紙〉

〈榎寺神社〉

〈神湊〉

北川民次

**KITAGAWA, Tamiji**

1894—

**瀬戸十景**

1937年(原版制作, 1961年出版)

リノカット 全10葉および表紙

いずれも右下に署名, 左下に番号: Tamiji, 35/29

表紙 工場の一角

11.2×11.2cm(紙面: 34.2×23.9cm)

窯小屋

13.4×18.0cm(紙面: 23.9×33.5cm)

土堀り場

15.9×12.7cm(紙面: 33.7×23.8cm)

煙突のある風景

19.6×13.0cm(紙面: 33.7×24.0cm)

夜の工場

12.5×19.4cm(紙面: 24.0×33.5cm)

工場のなか

19.7×13.0cm(紙面: 33.8×23.9cm)

ろくろを廻す男

19.5×12.2cm(紙面: 33.7×23.8cm)

山のなかの窯場

11.8×16.0cm(紙面: 23.9×34.0cm)

窯入れ

19.4×12.2cm(紙面: 33.9×23.9cm)

窯焼き

13.3×19.5cm(紙面: 23.9×33.5cm)

瀬戸市街

19.5×12.3cm(紙面: 33.8×23.8cm)

**Ten Scenes of Seto**

1937 (edition of 1961)

Lino-cuts

**Cover : Factory Scene**

11.2×11.2cm(sheet : 34.2×23.9cm)

**Hut with a Kiln**

13.4×18.0cm(sheet : 23.9×33.5cm)

**Clay Hill**

15.9×12.7cm(sheet : 33.7×23.8cm)

**Scene with Chimneys**

19.6×13.0cm(sheet : 33.7×24.0cm)

**Night Scene of the Factory**

12.5×19.4cm(sheet : 24.0×33.5cm)

**Inside the Factory**

19.7×13.0cm(sheet : 33.8×23.9cm)

**Men turning the Potter's Wheels**

19.5×12.2cm(sheet : 33.7×23.8cm)

**Ceramic Factory in the Mountain**

11.8×16.0cm(sheet : 23.9×34.0cm)

**Setting**

19.4×12.2cm(sheet : 33.9×23.9cm)

〈水繩山〉

〈筑後川〉

〈火の海〉



---

**Firing**

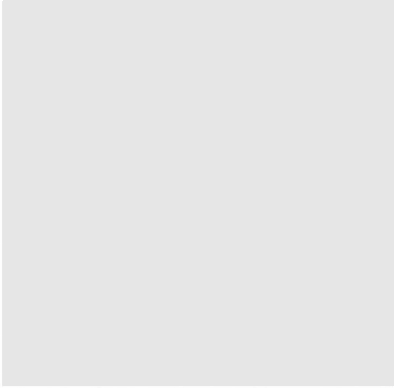
13.3×19.5cm(sheet : 23.9×33.5cm)

**Seto Street**

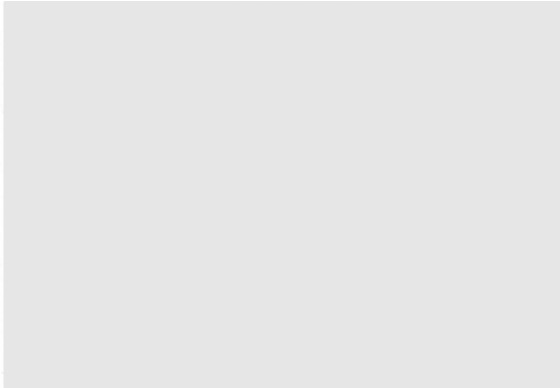
19.5×12.3cm(sheet : 33.8×23.8cm)

保管：石橋美術館

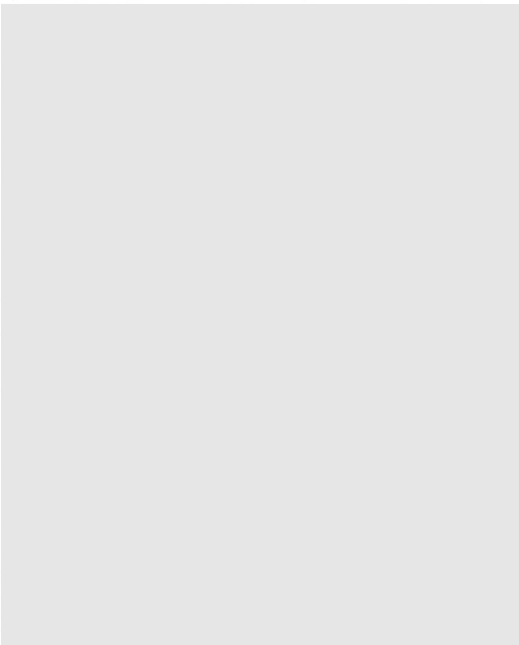
*Managed by Ishibashi Museum of Art (Kurume)*



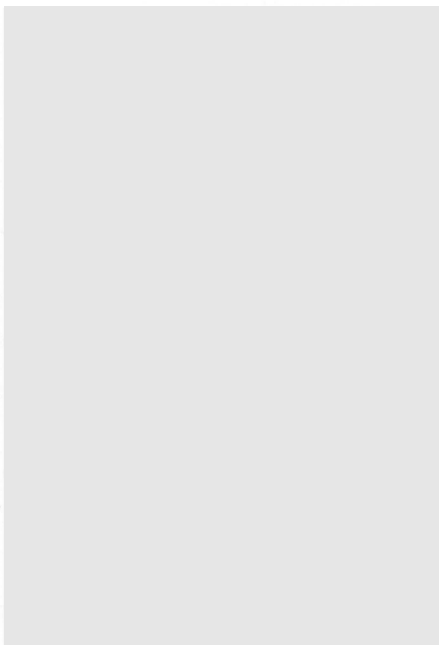
北川民次《瀬戸十景》〈表紙〉



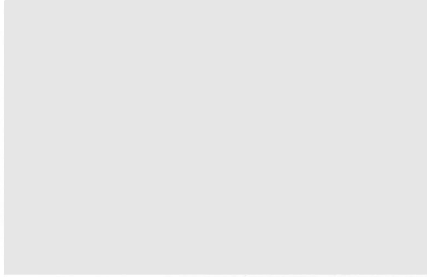
〈窯小屋〉



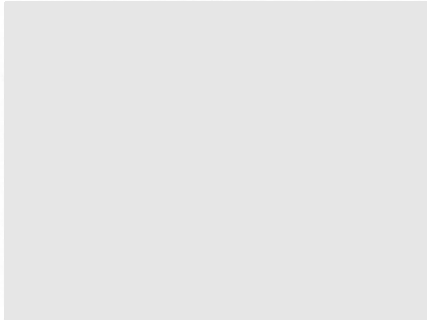
〈土堀り場〉



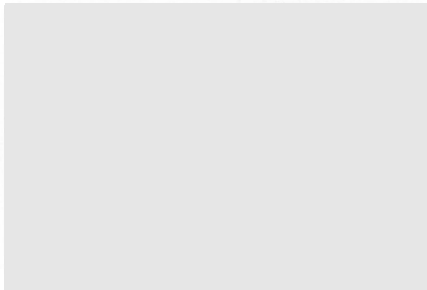
〈煙突のある風景〉



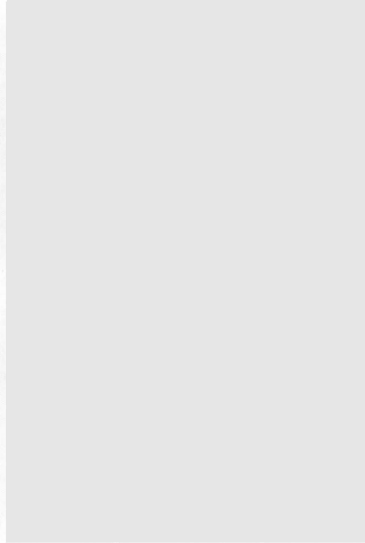
〈夜の工場〉



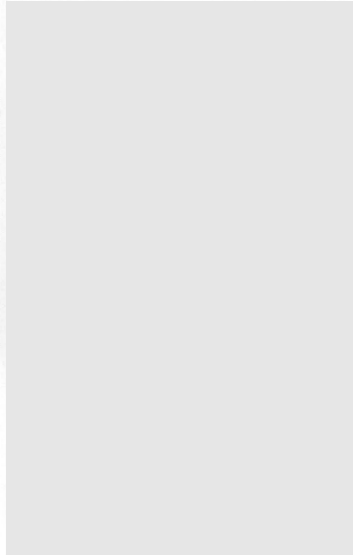
〈山のなかの窯場〉



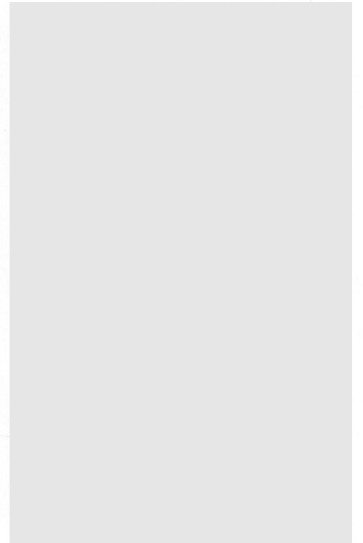
〈窯焼き〉



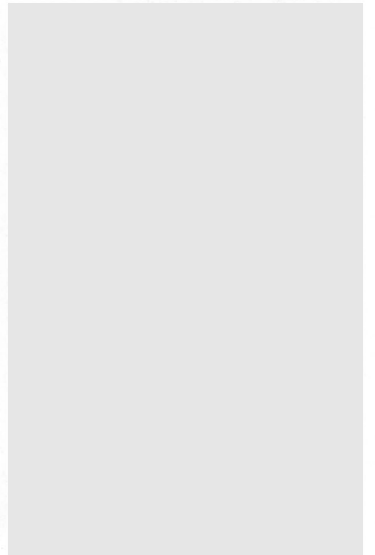
〈工場の中〉



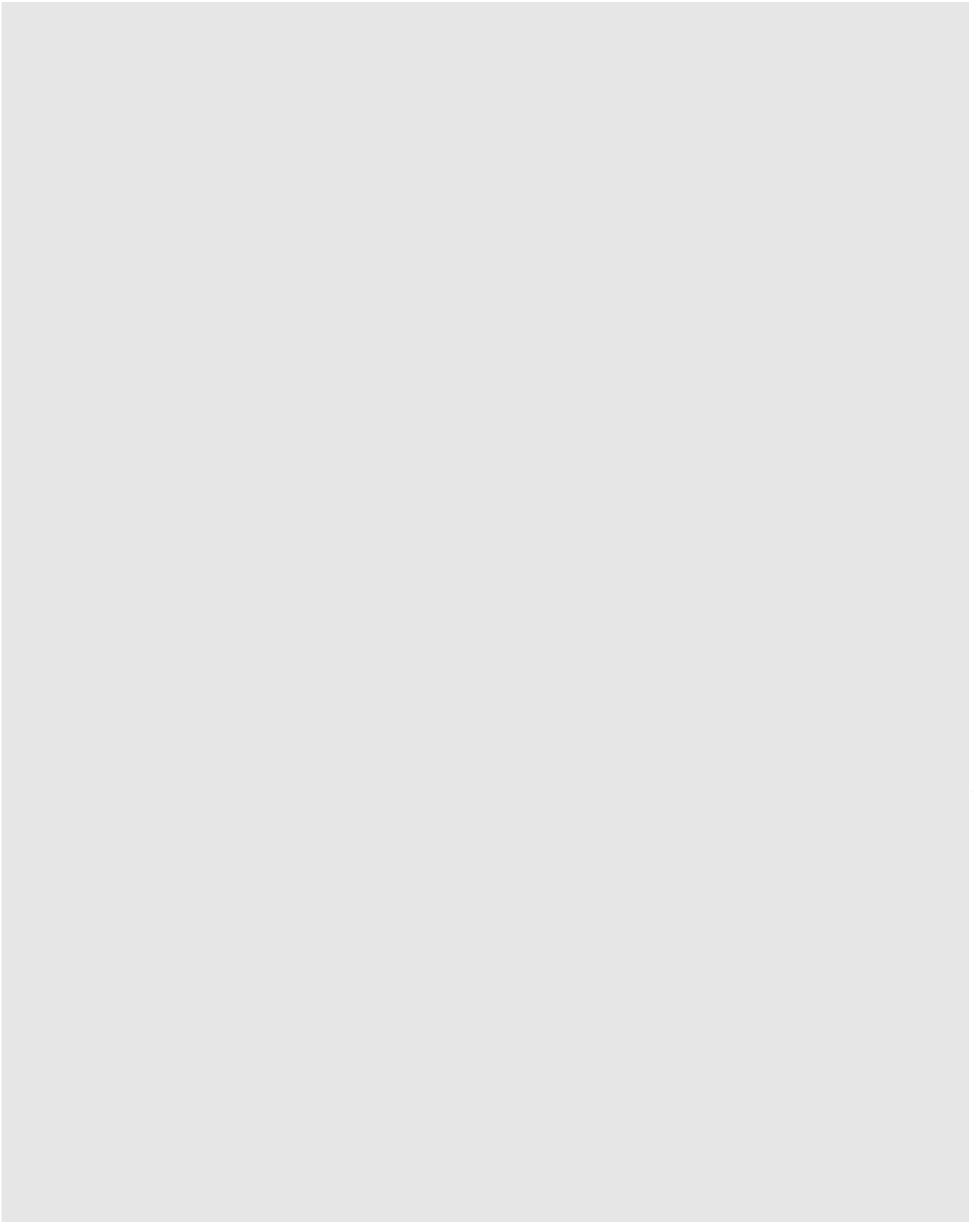
〈窯入れ〉



〈ろくろを廻す男〉



〈瀬戸市街〉



岸田劉生《南瓜を持てる女》 1914年

油彩・麻布 80.0×60.2cm

〔一般的所見〕

1. 画面寸法について

現在は800mm×575mmであるが、左右が約14mm前後、木枠に折りこまれている。本来は横幅が3cmくらい大きかったはずである。この縮少がいつ行なわれたか調査する必要がある。(註参照)

もし作者の変更であればそのままにすべきであるが、後に縮少したのであれば、本来の大きさに戻す必要がある。

2. 裏面の文字について

裏打をすると、裏面の文字が見えなくなる。そこで写真記録を残すと共に、裏打用の布は薄手のものを用いる。(不鮮明になるが裏書の判読ができるようにする。)

〔調査〕

修理作業に入る前に、作品の状態調査をして、作品の現状の把握と記録をした。ワニス・絵具層・下地層・支持体・木枠・額縁等の現状を詳細に調査し、修理計画及び修理時の参考にした。

写真記録は、モノクローム・カラー・赤外線・紫外線蛍光・X線撮影をし、また修理前、修理中、修理後に撮影した。

〔修復〕

1. 洗浄

修理前に行った画面の耐溶剤性テストをもとに、石油系、アルコール系等各種の有機溶剤を単独又は混合して、絵具層に影響を与えないことを確かめた上、注意深く洗浄した。

2. 裏打

(オランダ法)附着した表裏の塵埃を除去した後、作業中の画面保護のため、ワニス塗布、薄葉紙による表打をし

た。次に作品を新しい麻布地の上に接着し、画布の補強を行った。

裏打用の麻布は、あらかじめ糊分を完全に除き、経緯糸が直交するよう、強固な仮枠に伸張しておく。

接着は蜜蠟を主体とし、ダンマル樹脂・コロホニウム・その他を添加して固形度・粘着性・柔軟性を調整して、これを加熱圧して接着した。裏打の後、本来の画面の大きさにもどすため、新しく作った楔付の木枠に取り付けた。

### 3. 充填整形

絵具層の欠損部分は、炭酸カルシウムと接着剤を混合、練り合わせて充填し、周囲の筆触に合わせて凹凸を作り整形した。充填剤は欠損部分のみに行い、原画の部分に出ないように用いた。今回の充填剤は炭酸カルシウム＋カワ水を使用した。また木枠およびクサビを新調した。

### 4. 殺菌

発生したカビの防除は殺菌剤の含浸によって行った。この作品に対してはアルコールと P.C.P. を使用した。

### 5. 補彩

絵具層欠損部分で充填剤充填箇所は、原画上に出ないように注意深く補彩した。今回使用した絵具は水彩絵具・溶剤型アクリル絵具・その他であるが、将来除去の必要が生じた場合容易に除去できるものを用いた。

### 6. ワニス塗布

修理完了後、画面保護のためワニスを塗布した。ワニスはケトン樹脂を使用した。

(註) 別掲、中田裕子「岸田劉生《南瓜を持てる女》とその画面の縮小に関する一考察」参照

(渡辺一郎・創形美術学校修復研究所)

他に画面に向かって右端のオレンジ色の中には、にじみの技法が見られる。

〔損傷・劣化の状態〕

#### 1. 絵具層に生じた亀裂と浮上り

最も顕著な変異は、非常に厚く塗られたグワッシュに生じた亀裂および浮上りである。特に赤色に集中して発生していて、粉状の形状を示すもの(人物の顔面)、および深い大きな亀裂(花束の一部)とに分類される。

#### 2. 支持体の紙に生じた皺と波打ち

作品の固定の方法とのかかわりで発生した支持体の紙の皺、波打ちは、描かれた時の緩やかな脹らみとは異なり、歪みのある紙の周縁部を固定したまま長い年月を経たことによるものと思われる。特に上下方向の波打ちが著しい。

#### 3. 支持体の酸性化による黄変

〔修復処置とその手順〕

1. 台紙と作品とを分離した。接着テープの除去には石油系溶剤と水とを使用した。

2. 絵具層の粉状部分と浮上りとをポリヴィニル・アルコールの2%水溶液で固着した。

3. 石州和紙を周縁部に糊付けした後、裏面から僅かに水分を吹付け、仮張りにかけて支持体の波打ちを除去した。接着剤には、生麸糊の T.B.Z. 水溶液とカルボキシメチル・セルロースを用いた。

4. 幅1mmの最も大きく開いた絵具層の亀裂部分に、補強のためオリジナルの高さよりも低めに充填した。

5. 画面の周縁部と接着テープ痕の残った部分に僅かにパステル鉛筆で補彩した。

6. PH 7.5 の台紙に石州和紙のヒンジで固定した。接着剤は生麸糊を使用した。

マルク・シャガール《ヴァンスの新月》 1955-56年

グワッシュ・紙 64.9×50.0cm

〔組成についての所見〕

#### 1. 支持体

乳白色の厚手の洋紙(0.35~0.4mm)が使用されている。

表面には細かな布目状の凹凸が認められる。

作品の天地左右は刃物によって切断されている。

#### 2. 絵具層

グワッシュを使って様々な技法で描かれている。薄塗りの単一層の部分はわずかで、絵具層のほとんどが塗り重ねられている。極端な厚塗りが画面に向かって左側の赤色、および抱合している人物のうち右側の顔の赤色に見られる。また、画面中央やや左の花束の表現には、グワッシュがまだ濡れている間に目の粗い布を押付けて剥取ったと思われる技法が使われている。

(山領まり+田中千秋・山領絵画修復工房)



# 研究報告 1

## 古賀春江資料紹介

——デッサン・スケッチブック・ノート——

杉本秀子

古賀春江(1895—1933)の新資料については、これまで幾度か紹介されている註ものの、その全体が明らかにされたことはなかった。この新資料が石橋美術館の所蔵となったのを機に、今までの調査結果を発表させていただきたいと思う。古賀に関する資料は、東京国立近代美術館が蔵する画稿類やスケッチブックなどをも合せると、大変な数にのぼる。今となっては、彼もまた恵まれた画家の一人であったと言ってよいであろう。が、画家にしてみれば、作品以外にこれだけ多くのものが残されているのは心外のことであるかもしれない。もともと発表するために描いたり綴ったりしたのではないものを公表されるのであるから。しかし、私たちにとっては、画家をより理解する一助となることは間違いない。

新資料を紹介するにあたって、形状によって3つに分類した。半紙大の紙に描かれたもの(これをデッサン類とした)、スケッチブック、ノートである。その他若干の印刷物、水彩画、『梅』(1924年)の版画、書簡、原稿なども含まれるがこれらについては割愛した。

デッサンやスケッチブックの中には、現在図版などでしか見ることのできない作品、行方不明であったり焼失してしまった作品の下絵もあって、それだけでも興味深くながめることができよう。とともに、それら線による描写からは彼のなまの声が聞こえてきしなまいらうか。彼の内にある漠としたイメージが次第に形を得ていく過程を、それらは露にしているのではないか。でき上がった作品が決して易々と成ったものではないこと、混沌としたものの中から、おそらく手さぐりの状態で一本一本線を重ねていくうちに、少しずつ形が見えてくる、そのような創造の過程をそれらは教えてくれる。最晩年のデッサンやスケッチブックに見られる線の乱れは、確かに病気のしわざかもしれないが、しかしそうとだけはいきれないものがある。形をつくりあげる苦しみは年々強まっていったとも想像できるのである。ノートやスケッチブックにしばしば書き込まれている題名のメモは、みずからの作品(詩と絵画)に付すためにかなり真剣に考えられた痕跡を残すが、これらもまた、漠としたイメージを言葉で表わそうとする過程、いわば形を与えられる以

前の状態を伝えているように思えてならない。

(註) 新資料について紹介されている文献には次のものがある。

阿部良雄「未発表の古賀春江・青春のスケッチブック」『藝術新潮』28巻6号(1977年6月)

中野嘉一『古賀春江 芸術と病理』(バトグラフィ双書11)(1977年11月 金剛出版)

徳田良仁、島田紀夫、阿部信雄、中田裕子「新資料による古賀春江論」『日本病跡学雑誌』18号(1979年11月)

徳田良仁「古賀春江——夢幻と理知の詩——」『創造と苦悩の軌跡——東と西の世紀末芸術』(1982年2月 金剛出版)

## I デッサン類

枚数は全部で200枚余にのぼる。粗末な半紙に鉛筆書きが大半である。うち、作品の下絵、雑誌(書物)の装丁など、現時点で判明しているものを原則としてここにあげた。これら以外にも谷譲二『もだんでかめろん』表紙のためのデザイン、『新文藝時代』1冊～3冊(1932年1月～3月)表紙原画、『第18回二科展目録』原画(1931年)、『文藝日記』、『女性詩歌』や『若草』など雑誌のためのデザインその他があるが、その一つ一つを記すことはしなかった。また、複数の同図柄のデッサンをもつものもある。その他不明のものの中に、小説などの挿絵と思われるものが多く見られるが、古賀ならではの特徴が発揮されていないのは残念である。佐野年一の回想文(「古賀春江君の思出」『筑後』5-6, 1937年6月)の中に、「何うかして商品価値のある新聞や雑誌の挿絵を描かうとして、報知新聞紙上に挿絵を描いてみた事もあるが、大体失敗に終つてゐる」とあるが、これに該当するものも含まれているかもしれない。

各々のデッサンについて、題名(正確には、完成作品の題名、雑誌名や書名がほとんどである。表紙・挿絵下絵のうち No. 6, 10, 12, 14, 15, 16は掲載時に付けられた題名をそのまま用いた)、材質・寸法、制作年の順に記している。寸法はいずれも紙の大きさを測定したものであり、画面寸法を( )で示したものもある。補足は※で示した。

### 作品下絵

1. 無題 fig. 1  
鉛筆・紙 24.0×33.3cm(16.3×33.3cm) 1929年
2. 美貌なる虚無 fig. 2  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm 1930年
3. 彎曲せる眼鏡  
鉛筆・紙 29.3×18.9cm 1930年

4. 現実線を切る主智的表情 fig. 3  
鉛筆・紙 25.0×34.2cm 1931年  
※裏面も
5. 花野原 fig. 4  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm 1932年
6. 音のない昼の夢  
鉛筆・紙 33.0×24.0cm(26.2×20.3cm) 1932年  
※「月夜の鳥」の記入あり
7. 音のない昼の夢 fig. 5  
鉛筆・紙 33.0×24.0cm(26.7×20.7cm) 1932年
8. 散歩  
鉛筆・紙 24.2×33.0cm(20.3×27.0cm)
9. そこに在る fig. 6  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm(20.0×28.0cm) 1933年
10. 深海の情景 fig. 7  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm 1933年
11. 楽しみ饗宴  
鉛筆・紙 24.3×33.0cm(17.7×24.7cm) 1933年
12. 文化は人間を妨害する fig. 8  
鉛筆・紙 33.6×24.4cm 1933年
13. 文化は人間を妨害する  
鉛筆・紙 33.6×24.4cm 1933年
- 表紙(挿絵)下絵など
1. 片岡鉄兵『女性讃』表紙 fig. 9  
水彩・紙 28.0×26.5cm(19.5×16.5cm) 1930年  
※1930年5月 新潮社刊
2. 龍胆寺雄『放浪時代』表紙  
水彩・紙 24.5×18.0cm(18.3×12.2cm) 1930年  
※1930年7月 改造社刊
3. 菊池寛『有憂華』箱絵  
鉛筆・墨・紙 24.5×32.5cm(20.0×14.5cm) 1931年  
※1931年4月 新潮社刊
4. 菊池寛『有憂華』表紙  
鉛筆・紙 29.0×22.0cm(20.0×12.8cm) 1931年
5. 竹中久七『餘技』表紙  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm 1933年  
※1933年6月 詩之家刊
6. 檻(『東京バック』表紙)  
水彩・紙 30.0×22.8cm(21.5×19.2cm) 1929年  
※『東京バック』18-11(1929年11月)
7. 『詩神』表紙のためのデザイン  
鉛筆・水彩・紙 29.3×21.0cm 1930年頃
8. 『旗魚』表紙 fig. 10  
鉛筆・インク・紙 31.6×22.2cm 1930年  
※『旗魚』6号～8号(1930年5月, 6月, 12月)
9. デッサン  
鉛筆・紙 24.2×33.2cm 1931年頃
10. ロボットも微笑む(『東京バック』裏表紙) fig. 11  
鉛筆・紙 33.5×24.4cm(21.3×19.0cm) 1931年  
※『東京バック』20-6(1931年6月)
11. 『香蘭』表紙  
墨・水彩・紙 32.5×24.1cm(22.4×15.2cm) 1931年  
※『香蘭』9-7～9-12(1932年7月～12月)
12. 冬(『コードモノクニ』挿絵) fig. 12  
鉛筆・紙 24.3×33.0cm 1931年  
※『コードモノクニ』11-1(1932年1月)
13. 『週刊朝日』表紙のためのデザイン  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm(27.0×20.0cm) 1933年頃
14. 春のドライブ(『週刊朝日』表紙)  
鉛筆・紙 38.5×26.3cm(28.7×21.8cm) 1933年  
※『週刊朝日』23-5(1933年1月20日)  
画面枠外に以下の記入がある。雑誌社からの註文か。  
「一、顔を出来るだけ美人にして戴き度きこと。／一。  
窓から見える景色を華やかにして戴き度きこと。／一。  
全体の調子を明るく願ひ度きこと。／古賀春江氏」
15. 春のドライブ(『週刊朝日』表紙) fig. 13  
鉛筆・紙 24.0×33.0cm(27.0×20.0cm) 1933年
16. 街頭の初夏(『週刊朝日』表紙)  
水彩・紙 38.0×21.0cm(26.7×20.2cm) 1933年  
※『週刊朝日』23-26(1933年6月1日)
17. 模写(『精神病者の絵画』より) fig. 14  
鉛筆・紙 24.3×33.6cm(11.0×18.0cm)  
※H. Prinzhorn, *Bildnerei der Geisteskranken*  
(Berlin 1922)
18. 模写(『精神病者の絵画』より)  
鉛筆・紙 24.3×33.6cm

## II スケッチブック

「大正元年九月十三日夜」の年記のあるものから死の直前のものまで全30冊。大正元年(1912)9月と言えば、古賀が周囲の反対を押し切って上京後、間もない頃である。東京国立近代美術館所蔵の5冊(①1915年4月～6月, ②1925年～1927年, ③1927年, ④1930年, ⑤1927年～1932年)を加えると、彼の作画期全体をほぼ被い尽くすことになる。

各スケッチブックについて、制作年、寸法、年記その他の書き込み、補足説明の順に記している。制作年を推定するに、彼自身によって書き込まれた日付が手がかり

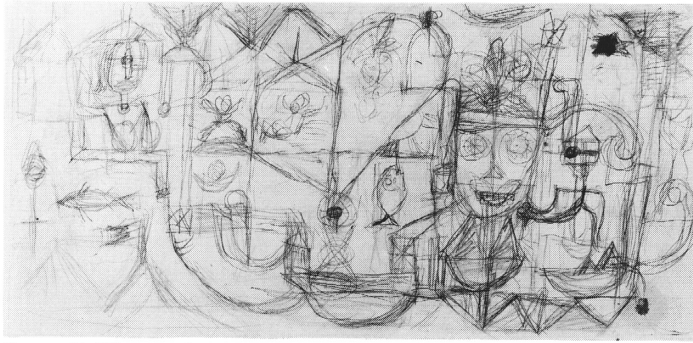


fig. 1 《無題》 1929年

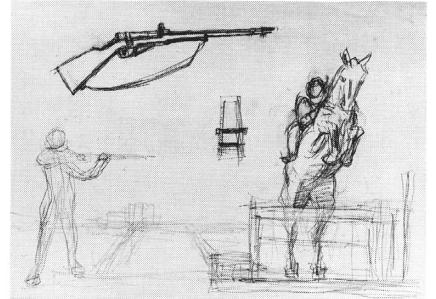


fig. 3 《現実線を切る主智的表情》 1931年

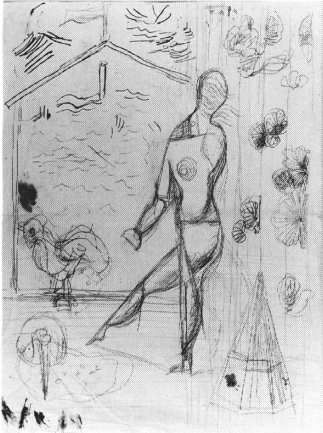


fig. 2 《美貌なる虚無》 1930年

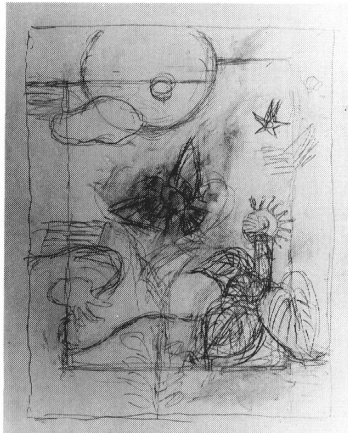


fig. 5 《音のない昼の夢》 1932年

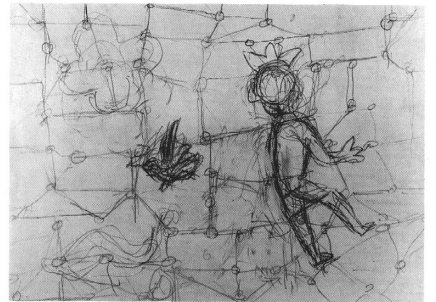


fig. 4 《花野原》 1932年

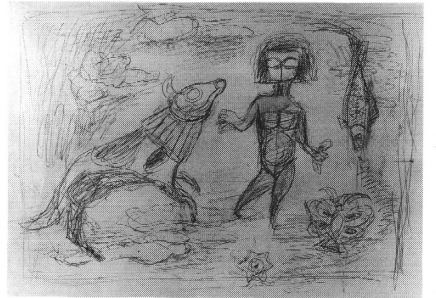


fig. 6 《そこに在る》 1933年



fig. 8 《文化は人間を妨害する》 1933年



fig. 9 『女性護』表紙 1930年

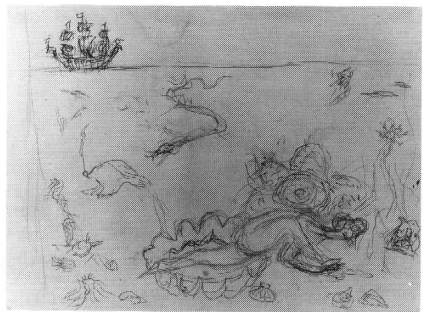


fig. 7 《深海の情景》 1933年

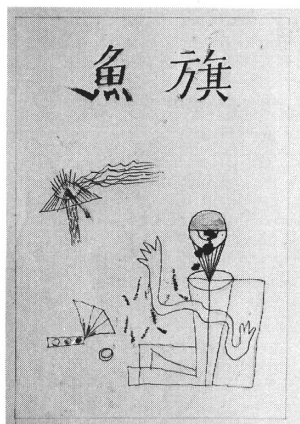


fig. 10 『旗魚』表紙 1930年



fig. 11 《ロボットも微笑む》 1931年

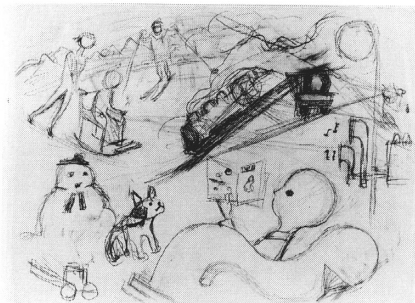


fig. 12 《冬》 1931年



fig. 13 《春のドライブ》 1933年



fig. 15 スケッチブック No. 1  
(1912年9月~10月)より

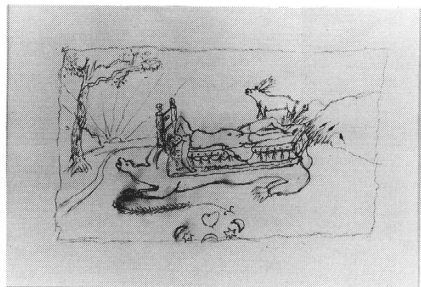


fig. 14 模写



fig. 17 スケッチブック No. 6  
(1913年8月~10月)より



fig. 16 スケッチブック No. 2  
(1912年11月~12月)より



fig. 18 スケッチブック No. 8  
(1914年4月~7月)より

となるが、年記のないものでも、作品の下書きや書名のメモなどから推定可能なものがかかなりある。年記その他の書き込みの項には、年代を明らかにする手がかりとなるもの、彼の心情吐露として興味深く思われる箇所のみ記している。年記とその他の書き込みとは重複するものもあるが、その場合でも分けて記した。一体に彼のスケッチブックには、短歌や詩、日記の形式をとったものなど、文字の部分が多いように思われる。若い頃のものほどその傾向が強いのは当然のことであろうか。友人の藤田謙徳の自殺前後のもの(No. 9)や翌年の長崎滞在中のもの(No. 10)は、ほとんどのページが文字で埋められている。

なお、引用文中、旧漢字はすべて新字に改めた。

1. 1912年9月～10月 fig. 15

18.8×12.5cm

「神楽坂 大正元年九月十三日夜」「泉丘寺にて 夕暮 14th sept 1912」「oct 29 1912」「12th october 1912」「三十日夜の印象 カグラ坂 oct 1912」「1912 sept-meber 23th」「水道端にて 14th sept 1912」「二十四日の印象 1912 sept」「赤児の泣き声 夜 31th october 1912」「神楽坂にて Xと逢ふたる時の印象 25th september 1912」「夕の騒音 犬の声 25th september」「たばこの煙 1912 september 25th」

2. 1912年11月～12月 fig. 16

11.0×18.4cm

「Nobembre Sketch」「大正元年十一月二十五日 昼食場」「帰り度き日 窓より 5日12月元年」  
大正元年(1912)、太平洋画会の妙義旅行に参加した時のものであろう。

3. 1913年4月～5月

11.0×18.5cm

「SKETCH APRIL—13 KOGA」「……四月三十日」「……五月三日」  
「あどけなき事と思へどかゝる／日はたゞ何となく故郷の／恋しき。」  
「灰色の壁よりゴホは脱け出でて／我耳に来て今日もさゝやく。」  
「近頃製作慾が馬鹿に起る／描いて見れば些とも出来ぬ／今日も植物園で失敗だ／腹が立ってならない／四月三十日」  
「今日も植物園で失敗だ／昨日も月島で失敗だ／五月三日」

4. 1913年6月

11.0×18.5cm

「June—23—1913 YOSHIO」

5. 1913年8月

10.8×18.0cm

「高良山おくの院にて」「八月一日 1913」「……—一三—八・七日」「八月八日の印象」

6. 1913年8月～10月 fig. 17

10.8×18.0cm

「一九一三年の八月の或る日だった。……」「……九月十九日夜」「……—十月廿八日よる—」

「凡てが孤独だ。」

「白き猫がヒョロヒョロと庭を横切／りぬかくて空ろな今日も暮／れたり。」

「色々の事をばみんなして見／たい人の命はたつた五十年。」

7. 1913年11月～12月

11.2×18.8cm

「十一月三日の太陽が真赤に／大島の右岸に沈むを望て……」「……十一月七日」「……十一月五日夜」「十二月二十三日 電気館にて」「……—二年十二月二十一日—」「8—30th, 8—31th」

「浅黄色の霞の底に眠り／たる都よさらばいざや別／れん／Scetch TABINO MAKI」

「今日描きし絵を見る事が苦し／かりかくて愈乱るゝ心。」

「もう一月で大正二年もお終ひ／だ。過去一年間にした仕事／を振り返って見ると随分下／らない事ばかりである。／つまらない。つまらない。／斯うして一生が終るのだらう／か」

大正2年(1913)11月、古賀は房州布良へのひとり旅に、このスケッチブックを携えて行ったようである。「世を逃れ都を逃れし弱き／児は吸はれて行くか真黒／き海に」といった若者特有の感傷と孤独感を詠んだ歌が多数記されている。

8. 1914年4月～7月 fig. 18

13.9×18.3cm

「三年四月一日」「——四月十一日——」「三年七月廿日」「——七月十八日朝——柳河にて」

「花が咲く様に描き／草が燃える様に描け。」

「わがこゝろ何を求むるこの心／暗闇のみち彷徨ひて行く。」

「Life must be lived,/not thought about./Futurism.」

「可成強くなったと思つてゐた僕は傲慢／だった。それは極く弱い男の周囲から強／られた自信？に他



ならなかった／自分の見くびってゐた奴にまで散々  
蹴／躪された それを知ってから僕は／自分のなさ  
けなさに泣いた。／自分の内からはほんとうに強くな  
れと要／求してゐる もうちぎだ。／ぶっとかる物  
の凡に打衝かる／それは——かたい事だ。」

「螢は自分の行く道は真暗だ／けれども通った道は  
照らされて／ある 自分の道もそんな気がする。」

大正3年(1914)7月、松田諦晶と柳川へ出かけた際のスケ  
ッチも含まれる。

9. 1914年9月～12月 fig. 19

10.8×18.3cm

「……—九月六日」「……—十二日—九月」「…  
…—十五日—九月」「……十月—八日午前」「…  
…—十一月十九日よる」「……十二月九日よる」「…  
…十二月十日よる」「……十二月二十八日よる」 他

「自分の仕事が曖昧になるのは／自分に信仰がない  
からだ信念／がないからだ／勿論信仰も信念もさ  
うした意／識的のものぢゃないのだけれども／後で  
それは分る事だ 邪念が／あると現在してゐる自分  
の仕事も／つひ不純なものになって終ふだ／らう

そして意識的になってゐる／自分にはよくこんな  
事がある／忘我の境に入る時最も自分の／事をして  
ゐるのである事を知つてゐる (それだけ駄目だ  
と思ふ)／気の弱い自分は知ってゐるから／不純に  
なるのだ 何にも知らなかつたらいゝだらうと思ふ  
／そうしたら自分に信仰が出来る／筈だ——九月六  
日」

「何か画きたいと思へど／……何にもかけず／何か  
し度いと思へど／……何にも出来ず／……何にもか  
け／ず何にも出来ない苦しさに／猶更したいと思ふ  
……(以下略)……—十二日—九月」

「芸術は理論ではない 信仰である／恍惚である  
無我境より出る創作／である How to…ではない／  
芸術に径程はない それ自身始／であり終りである  
／故に我々の生活は其れ自身創作／であれば径程と  
いふものはない／何処を切り放して見ても其の部分  
／が全部であらねばならぬ／unity is virnity であ  
らねばならぬ／——二十五日よる」

見返し部分に「古賀よしを」の署名があるとともに、他の部  
分には「春江」の記載も見える。「Kちゃん」という呼びかけ  
で始まる長文は、大正3年(1914)11月初めに猫いらず自殺  
をとげた藤田謙徳への思いを綴ったものである。

10. 1915年1月～3月

11.2×18.5cm

「一九一四<sup>a</sup>——五 はるえ」「……一月廿七日夕」「二

月四日——」「……二月五日——」「……八日夜十二  
時」「……十一日」「……十三日」「……二十三日よる」  
「……—二十八日」「……四日」「十三日夕」「十五日  
朝」「……二十二日よる」 他

「こんな生活！／こんなふやけた生活！／何時まで  
続くだらう——これで若しこのまゝ／になってゆく  
なら……とても堪えられぬ／俺の肉体と精神の衷真  
からモットモット／力強いものが込み出なくてはな  
らない／精神的生活！／肉体的生活！／そんなもの  
ではとてもとても駄目だ／精心と肉体とが渾然と溶  
け合つて一塊／をなして自由にころげ廻る所に始め  
て／新真生活はある／十六日よる」

大正4年(1915)、長崎滞在中のものである。「こんな生活  
！」で始まる文は、当地で親しくなった女性に会いたく  
とも会えない焦りを綴ったものであろう。この直前には  
「……(前文略)……余り手温るい もう事は焦眉の急だ／  
新真生活に入るか……それとも因襲／の俘囚となって朽ち  
るか／二つに一つだ」とも記されている。

11. 1915年7月～12月 fig. 20

10.8×18.5cm

「大正四年七月廿九日より——はるえ」「一九一五  
十月卅一日」「十一月十五日」「十二月七日」

『みづゑ』143号(1917年1月)掲載の《瀑のほとり》のスケッ  
チがある。

12. 1917年 fig. 21

15.5×23.5cm

《檜》(1917年)のための習作が含まれる。

13. 1917年8月

15.5×23.8cm

「1917 aug 13 なぶと」「……一九一七・八・二五」

大正6年(1917)夏の波太旅行の際のスケッチが大半を占め  
る。美術雑誌の他、「早文」、「三田文」、「新小説」などのメ  
モがある。

14. 1918年頃

15.5×23.5cm

No. 13と同様、電話機の描写があることから、1917年頃  
のものと同定できる。

15. 1918年頃

10.3×18.0cm

制作年は、書き込まれた書名からの推定である。雑誌『智  
慧』は大正7年(1918)4月に創刊号が出ているのみである。  
その他「ベートペンとミレー」、「タゴールの哲学と文芸」  
「トルストイ十二講」などのメモも見える。



fig. 19  
スケッチブック No. 9  
(1914年9月~12月)より

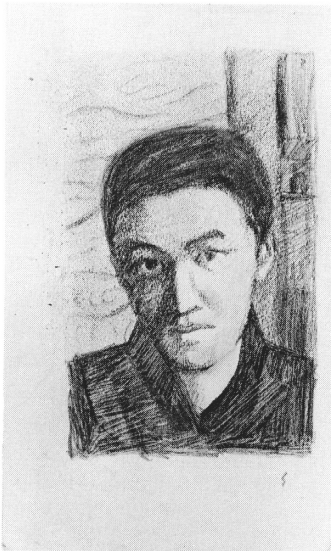


fig. 20  
スケッチブック No. 11  
(1915年7月~12月)より

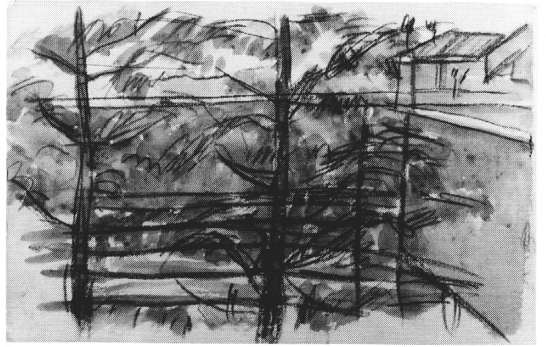


fig. 21 スケッチブック No. 12 (1917年)より



fig. 22 スケッチブック No. 16 (1922年頃)より

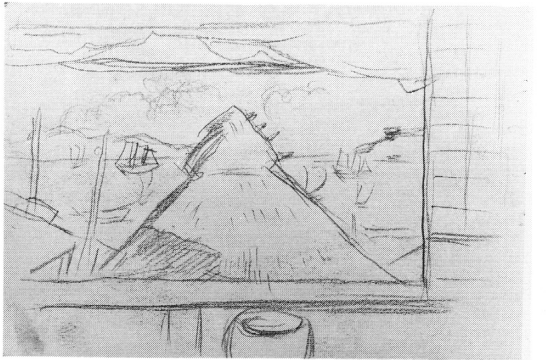


fig. 23 スケッチブック No. 17 (1922年7月~8月)より



fig. 24 スケッチブック No. 17 (1922年7月～8月)より



fig. 25 スケッチブック No. 20 (1923年)より

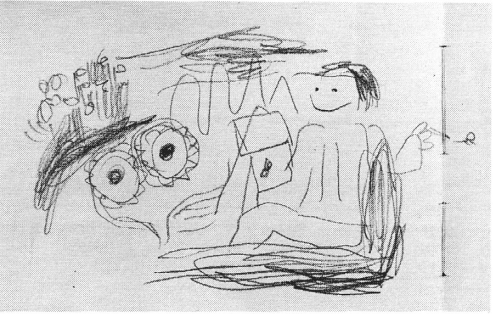


fig. 28 スケッチブック No. 22 (1925年～1926年)より



fig. 29 スケッチブック No. 25 (1931年頃)より



fig. 26 スケッチブック No. 21 (1925年頃)より

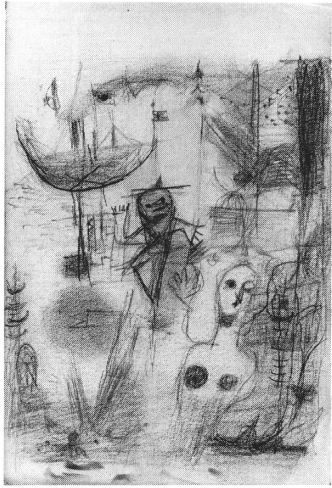


fig. 27 スケッチブック No. 21 (1925年頃)より

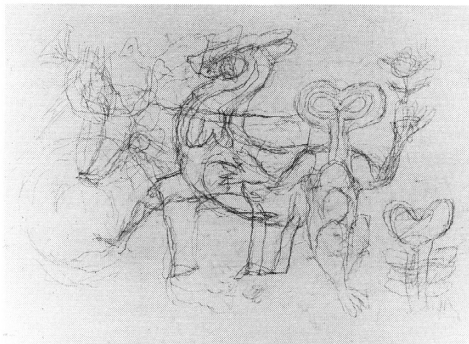


fig. 30 スケッチブック No. 26 (1933年)より

16. 1922年頃 fig. 22  
14.7×22.2cm  
「おーこの果てしない夢想の自覚的／(又は無自覚的)な憧憬の目標よ。」  
《埋葬》(1922年)のためのスケッチと思われるもの、《休息》(1923年)の習作が含まれる。
17. 1922年7月～8月 fig. 23 fig. 24  
13.8×20.7cm  
大正11年(1922)夏、松田諦品と出かけた筑前鐘崎海岸(福岡県宗像郡玄海町)でのスケッチが大半である。《二階より》や《縁側の女》(いずれも1922年作)のスケッチを含む。
18. 1922年8月～11月  
13.5×17.7cm  
「8, 28」「8, 29」「8, 30」「九月二日」「9, 2」「十一月三日」「十一月、四日」「五日、十一月」「大正十一年十一月五日」「十一月、五日」「十一月、十一月、十一月」  
大正11年(1922)夏から翌年1月頃にかけての筑前芦屋海岸(福岡県遠賀郡芦屋町)滞在中のものであろう。「肉眼に見える星の研究」、「劇と評論」、「仏蘭西文芸の話」など書名のメモがある。
19. 1923年頃  
15.0×22.0cm  
『みづゑ』222号(1923年8月)掲載の《公園の松の木》のスケッチ、《海辺風景》(1926年の二科展出品作)、「海水浴」のスケッチが含まれる。
20. 1923年 fig. 25  
15.0×22.0cm  
福岡市街のスケッチ、第2回アクション展出品作《風景》のスケッチなど。ピカソの模写(あるいはピカソ風の習作)。「児童芸術叢書第二編」、「アナーキスト列伝」、「美の哲学クロイテエ」、「社会革命史論」などのメモもある。
21. 1925年頃 fig. 26 fig. 27  
18.0×27.0cm  
「形を確かにして／色を種々取り／合せ相等の塗<sup>リ</sup>厚と／濃淡を確強に区別す／寒色に気をつけよ ローゼンナ等で妨ぐ／コバルト系を善用せよ、筆解を柔剛／混ぜ織り込むべし 形象を抜き出させ」  
行方不明の《肩掛けの女》(1925年)の習作、雑誌『手帖』1—5(1927年7月)掲載の《素描》など。
22. 1925年～1926年 fig. 28  
14.0×20.5cm  
『中央美術』11—8(1925年8月)掲載の《花》、『中央美術』12—8(1926年8月)掲載の《スケッチ》、《赤い風景》(1926年)のスケッチが含まれる。「昇」、「新ロシア美術大観」、「動物詩集 アポリネール 堀口大学」などのメモも見える。
23. 1927年  
28.0×24.5cm  
《収穫》(1927年)の習作。
24. 1928年頃～1932年頃  
14.0×22.0cm  
《山ノ手風景》(1928年)の部分スケッチ、クレー《Feather Plant》(1919年)の鉛筆模写、《孔雀》(1932年)の習作と思われるものなど。書名の書き込みも年代推定の手がかりとなる。蔵原惟人著『プロレタリアートと文化の問題』(鉄塔書院)は、昭和7年(1932)6月の刊行である。
25. 1931年頃 fig. 29  
14.5×22.0cm  
菊池寛『有憂華』の装丁に関するメモ、「芸芸評論 小林秀雄」、「ソビエト芸術の全展望 茂森唯士」、「マルクス主義芸術学研究」、「観念形態論 三木清」、「マックス・ジャコブ詩法 堀口大学訳」など書名のメモも見える。
26. 1933年 fig. 30  
14.5×22.0cm  
「一つの定義(或は命題以前)／古典的な風景／提言は可／答案として一応は可／夕暮れに廻る星／誕生／思念の仮死時間の／すっかり何んでも持って居る／暗闇に眼覚めてゐる者／凡てのものを持ってゐる／挿話の一片／鳩の歌／一色の定理」  
「一、深海の風景／一、サーカス景／人間主義は文化を妨害／する／□□□□」  
作品名のメモらしきものが記されている。《鳩の唄》、《抽象》(いずれも1933年)のスケッチ、水上・湯檜曾でのスケッチも含まれる。
27. 未詳  
10.5×18.0cm  
好江夫人の顔のスケッチが含まれる。
28. 未詳  
15.5×23.5cm  
「ハウプトマン傑作集」、「秋色足跡」、「黎明」、「リラの花」、「虚げられし人々」、「屈辱」、「散文詩ツルゲーネフ」などのメモがある。
29. 未詳  
14.1×22.0cm
30. 1922年頃？  
11.5×18.3cm  
「先端を十文字に万そう膏でくゝる事／ゴム管を短かく切って貰ふ事／濃をよく出して貰ふ事／先生に

してもらふ事」

「一人だ——。／わがために自殺したものゝ描かれたパンの種である。／僅かな金に□を得たいばかりに」

ピカソ、ローランサンの模写。制作年は書名のメモを手がかりとした。佐藤惣之助『華やかな散歩』、萩原朔太郎『新しき欲情』などの書き込みがある。

### III ノート

全12冊のうち6冊(No. 2～No. 7)は雑誌などに発表した文の下書きで埋められている。現在判明しているものについては、草稿として、題名と発表された雑誌名などをあげた。ノートには題名の記入はほとんどないが、便宜的に発表時の題名を用いた。不明のものについては、その他の項にあげ、全文あるいは部分的に転写したものもある。未発表の文もあるかもしれないが、おそらくは何らかの雑誌などに発表されているにちがいない。なかには古賀以外の手になる文章も含まれていよう。写しであることを恐れず転写したものもある。各記事に関して補足があれば※で示した。

引用文中、旧漢字はすべて新字に改めた。

#### 1. 1917年頃

〔書き込み〕

「古賀はるえ」庚申 TAISHOROKUNEN ROKU-GATSUGO」

宗教大学で学んでいた頃の聴講ノートであろう。各宗要義、心理学、浄土宗史、国史などの講義メモがある。「庚申」とは大学の仲間たちで発刊を企てた雑誌の名前であろうと推測できる。その表紙のデザインを古賀が担当したのか。同じ大正6年(1917)頃のスケッチブック(No. 12)にも「庚申」という文字と図案が描き込まれている。

#### 2. 1923年頃

〔草稿〕

「仏蘭西現代美術展覧会を観る」『みづゑ』219(1923年5月)

聖母子像などのスケッチ多数。

#### 3. 1923年

二科福岡展開催準備に関するメモ。その他スケッチ多数。

#### 4. 1923年頃～1926年

〔草稿〕

「日暮里駅」『中央美術』11-3(1925年3月)

「丘」『マロニエ』2-3(1926年3月)

「喜ばしき船出——『新しき時代の精神に送る』の著者へ——」『みづゑ』229(1924年3月)

「春展寸感」『アトリエ』2-4(1925年4月)

「美術家家勢調査」『中央美術』11-6(1925年6月)

「思ひつく事など」『美之國』2-10(1926年10月)

〔その他〕

・創作。

※途中から好江夫人の筆跡に変わる。

・「摸倣芸術と対象性に就いて」

・「美文大辞典」

※以上2文は好江夫人の筆跡。

・自作《涅槃》寄贈感謝状に対する返事。

#### 5. 1923年～1930年

〔草稿〕

「新東京の美観問題」『みづゑ』225(1923年11月)

「銀ブラ、浅草観音」『中央美術』12-2(1926年2月)

「造型第一回作品展覧会を観る」『みづゑ』255(1926年5月)

「橋本八百二氏・堀田喜代治氏洋画展感」『中央美術』12-7(1926年7月)

「春素描」『中央美術』12-8(1926年8月)

「短詩六つ——坂、花園で、港、七月、関係、或る夜更」『みづゑ』258(1926年8月)

「野原」『古賀春江』(1934年 春鳥会)

「造型第二回展感」『みづゑ』260(1926年10月)

「日本水彩画会展覧会感」『中央美術』13-3(1927年3月)

「至上主義者の弁」『アルト』7(1928年11月)

「鬼夜の話」『中央美術』15-2(1929年2月)

「あんなに泣いてはいけぬ」『中央美術』15-1(1929年1月)

「銀色の審美学——海辺風景、少年の願望、点景」『みづゑ』289(1929年3月)

「青空に描く素描」『中央美術』15-5(1929年5月)

「円筒形の画像——宇宙の爪、古き窓、晚餐、直線の如きもの、点景」『みづゑ』299(1929年10月)

※ノートには「円錐形の画像」と記されている。

「パントマイム」『古賀春江』(1934年 春鳥会)

「無題」『古賀春江』(1934年 春鳥会)

「精神のとある一瞬に見るもの或は遠景の拒絶」

「一人の神話」『水中の針』いずれも『古賀春江』(1934年 春鳥会)所収

「ぼんやりした話」『婦人サロン』1-4(1929年12月)

「とりとめもなく」『文藝春秋』7-12(1929年12月)

「空間の整理」「感傷」「アポロンの花」いずれも『古賀春江』所収

「道徳的なる一つの門」「朦朧とした眼鏡」『セレクト』

1-4(1930年4月)

「腕力の讃」『香蘭』8-3(1930年3月)

「満開の花の咲いた列車」『花』「鳩の指」いずれも『古賀春江』所収

「超現実主義私感」『アトリエ』7-1(1930年1月)

「弱気」『アトリエ』7-1(1930年1月)

〔その他〕

- 図画教育に関するアンケートへの答え。  
※「造型第一回作品展覧会を観る」草稿と「橋本・堀田洋画展観」草稿の間に記されている。大正15年(1926)頃のものか。「正確なる客観描写」を推奨している。
- 「心経中枢 彼女は決して躊躇くことをしない」  
「彼は磨かれた素脚の隻脚で立つ」で始まる詩2篇。  
※「あんなに泣いてはいけない」草稿のすぐあとにつづく。  
昭和4年(1929)頃のものか。
- 「我々が普通現実と称んである所／の夢の迷信から我々は一時も早く／脱却しなければならない」  
「自転車は地上を走り飛行機は／空を飛ぶ」で始まる2文。  
※「無題」(詩)草稿のあとにつづく。いずれも自身の絵画観を述べたものである。「……画は／画それ自身が一つの自然である……(中略)……テーブルの上に建／つてゐる家も自然である……」(後者から抜粋)という文章などは《素朴な夜夜》(1929年)の解説文として読むことも可能であろう。
- 「影のない風景」と題された詩。  
※前2文のあとにつづく。

## 6. 1930年～1932年

〔草稿〕

「奉讃展記」『アトリエ』7-5(1930年5月)

「黎明の脚」『古賀春江』(1934年 春鳥会)

「現代絵画の動向に就いて」『クロツキー』6(1930年9月)

「我国の新しい絵画と画壇に就いて」『婦人サロン』2-10(1930年10月)

「『窓外の化粧』に就て」『みづゑ』307(1930年9月)

「極めて鮮明なる文明の縞——歓喜と欲望の定規、

游泳する腕の眼鏡、爪」『みづゑ』307(1930年9月)

「一九三〇年の印象・ABC」『近代生活』2-12(1930年12月)

「寸言、不平不満」『アトリエ』7-12(1930年12月)

「新興リアリズムに就て」『ヒューザン』11(1932年2月)

「広告風船」『週刊朝日』19-17(1931年4月5日)

「街の天使」『週刊朝日』19-21(1930年5月3日)

第一書房刊『古賀春江画集』(1931年)解題詩(全31篇)

「洋傘」『週刊朝日』20-15(1931年10月1日)

「或日の日記——月夜、素描、季節の魅惑」『みづゑ』322(1931年12月)

「写真と空想 或は具象と抽象」『ヒューザン』12(1932年4月)

「製作」『古賀春江』所収

※紙片に記されている。

「海の夏祭り」『美之國』8-8(1932年8月)

「展覧会前景」『美術新論』7-9(1932年9月)

「顔」『美術新論』7-10(1932年10月)

「秋」『週刊朝日』22-17(1932年10月)

「印象に残る元旦」『週刊朝日』23-2(1933年1月2日)

「早春随想」『文學時代』4-4(1932年4月)

〔その他〕

- 詩の題名のメモ。「游泳する腕の眼鏡／昇る魚／延びゆく曲線／移動する円筒／熱情ある定規／金□の歓喜と欲望／爪／祝福さるゝ鶯／鮮明なる運動の波濤——縞／極めて一般的なる文明の天才——縞」  
※「『窓外の化粧』に就て」のあとにつづく。
- 「我々の現実の中には空想もあれば理想もあり／夢もあれば実行もある それ等をたゞ／忠実に描写するといふことに何の意／義もあるものではない／芸術はそれ等を統一し方向づけ芸／術価値を構成するにある／普通に所謂の技術として見ても写／実といふことは現実の客観的表現を／目的とするといはれてゐるけれども／厳密に解釈すれば至って困難な／ことで我々の視覚と／いはれるものがどの程度まで客観的真／実を捉へ得るかといふことさへ問題／となる……(中略)……凡ての存在が變つてゆく／ものをある一定の固定的画／面に写すといふことそのことが既に不可能／ではないか」  
※「新興リアリズムに就て」草稿のすぐあとに記されているもの。あるいはそのつづきか。
- 「リアリズムの芸術とは何か」で始まる画論。  
※「広告風船」のあとに記されている。
- 昭和3年(1928)の長崎滞在中のこと(随筆)。  
※「街の天使」のあとにつづく。昭和6年(1931)頃のものか。《生花》制作時の思い出も記されている。
- 間所一郎作品頒布会推薦文。
- 機械と美術との関係について。  
※紙片に好江夫人の筆跡で記されている。
- 作品題名のメモ。「現実線を切る主智的表情／燦めく生理／浮き上る鋭角／時間的事象の弁明(包まれたる懐疑)／霧のかゝつた機械的因果律(物理



・化学)／の表情／仮設の現実線を越える馬／人形の夢と科学の一系列／掩はれたる時間の弁明を／粉碎するもの／勤勉なる——時間の直線——眼『秩序(歴史)ある時間の直線』／記憶は翳げる／感傷の生理に就いて／叡知——情熱の現実線を越える馬／側面の線を整理せよ／感覚を透視する／秩序の一経程に就いて(或は／一つの方法論として)／朧ろな夢の生理に就いて」

- ・「広い窓縁に腰かけて娘は時計ネチを捲い／てゐる」という語句で始まる詩。
- ・荒井一郎作品頒布会推薦文。  
※以上3篇が「洋傘」のあとにつづく。
- ・自作解説(《朧ろなる時間の直線》について?)「我々の時間的な現実の認識を・その素材／を客観の形象を借りて表したもので朧げな一つの観念形態を成す／ポエジーであると思ひます それを即物的な技法を借りて／表した心算です／裸体の女はこの場合／海の魚族と一緒に個々の物それ自身として／は此場合有機的に溶け合／ったのから合ふことはなく各個は／各々独立した存在です或る一つ／の時間の概念的(線の)記録と云へませう」
- ・衣装図案について(自作図案解説)。  
※以上2篇は「季節の魅惑」のあとにつづく。
- ・奥田とし子作品頒布会推薦文。
- ・「六月になると凡ての人の感覚が鋭く清澄／な透明体になり世界の果までも感得／されて澆刺とした精神が躍動／する」という語句で始まる随筆。
- ・「美人といふ定義が主観的に／決定されるものだとするなら 私は未だ／美人といふ人に遇った記憶がありません」という語句で始まる美人論。  
※以上の3つの文は「写実と空想」草稿のあとにつづく。
- ・自作解説(《孔雀》について)。「この画は普通所謂花鳥図とも云ふ／可きもので別に意味のあるものではあ／りません 古来より美しいとされて来／た孔雀と花との視覚的な／美しさを描いたまでのものです／少し写実的に細密に描きたかった／のでそのために少しばかり苦勞しました／方々に孔雀を見て歩きました／が差し当り日比谷公園のがこの時／一番美しく羽を開くのでそれを／主にして毎日日比谷に通ひました……(以下略)……」  
※「展覧会前景」草稿と「顔」草稿の間に記されている。
- ・「私は日常の殆ど全時間が考へることに費されてゐる 人が聞いたら馬鹿馬鹿しいといふだらう／やうなことばかり考へてゐる しかしこれは仕方が／ない 何にも具体的に表現されないのによそ

／から見たらのんきな風に見えるが当然と思ふ／庭先の大きな銀杏の木の風貌 天候との関係／朝と夕暮とに於けるその木の表情 雀と／屋根の瓦 犬達の生活と新聞の文芸欄／いろいろな広告の記事 大工さんのカンナと／金槌の音 向ふ家の少女君の金切声／これ等がみんなあるものがある／それが一つに／つながってゐるのである それをよく理解しやう／と考へる 空間とは時間の墮落したもので／あるといふ ベルグソン カントの純粹認識と／マルクスの唯物弁証法 湯殿でパチャパチャ／言はしてゐる女中さん 沙漠の月／このあるものゝつながり それをよく知る事／これと私とのつながり／私の日常生活はそれ等の抽象と具像との感／覚的認識を土台として一つの観念形態と／しての構成をすることです／こゝにいふことになって来ると私の芸術／論を持ち出さねばならないがそれはとても大変／だからこゝでは出来ない／翫味せよ(翫味なる言葉を)／究めよ」

- ・作品題名のメモ。「認識の試練 答はゼロ／答弁は一応諾／朗らかな署名／微笑する風景／出題は一応諾／花と昆虫 悪の日誌」  
※「印象に残る元旦」草稿と「早春随想」草稿の間には以上の随筆とメモ以外にもいくつかの文が記されている。

## 7. 1933年

[草稿]

- 「病床にて『古賀春江』(1934年 春鳥会)
- 「動物園の白熊」『みづゑ』343(1933年9月)
- 「《サーカスの景》解説」『みづゑ』343(1933年9月)
- 「早春随想」『文學時代』4-4(1932年4月)

※別紙に記入

[その他]

- ・「転形期の思想」と題された芸術論。「現代は芸術の衰微時代だ 凡ての芸術が古代より／時代を追ふて／平凡に時代時代に受け次げられて其時代時代の／花として続いて行つた……超現実主義も今日最早それ自／身活動を尽して次々時の生産の力を失滅し／た 昨日までの芸術の美は最早今日の美では／なく芸術ではなくなった……芸術一盤／が新しい／生れ来る世界にその先端に立って如何なる／方向と方法を持って行くか——それが目下急／務の目題(使命)である／殊に絵画に於てその二問題は大きい／今日の芸術と計らされてゐる絵画は／昨日までの使命を持ってゐたもので・今日以後の役目を果すものではない／現実にある芸術それは夢のやうな儂かない美／しか持たない

昨日の夢しか過ぎない存在である／芸術はその存在としては本質的に社会変化の／歴史の／反映に相違はない。その現実存在として自然現／実の物質には単なる美しいもの、物質的形<sup>3</sup>式的視／覚的存在に過ぎないが故にそれは感情的感覚／的であり従来<sup>4</sup>の自然芸術にある／真の芸術は文化的反映は<sup>5</sup>／認識的の観念的構成であり／だから真の作品は理知主義であり主情主義で／はない／色彩形態線は数学的素材の科学的——具体的数学的であり／表現は記号的になるべきである／その素材の構成に就いて感覚的より観念的に。」

- 「我々は微力な□□だ／これからその全力を以て古いゆるゆる脚した／自我主義を全て蹴踔<sup>6</sup>して今まで／あった凡ての芸術精神を一蹴して新しい世界／の文化／の尖端に立って—□の力を尽さうと思ふ／若い芽立の生々とした同志達よ集れ。」
- 「芸術文化の前衛として／此の新しい時代に対して其動行を(芸術界と一盤社会)明示しその意義／を意味あらしめるやうと決意し四人が同盟し／て立つた 諸賢の御示教と御賛成を／願ひます」
- 「芸術文化の尖端的な前衛存在として／自然的芸術論より観念的芸術論とその現実／的在在のために方法論を究明するもの／病幣、感覚的創作の實踐的否定より観念的創作／の實踐的肯<sup>7</sup>へ 芸術的存在の現在<sup>8</sup>は、滅亡してもその本質在在は滅亡しない／没落したと云はれないが今我々には今迄<sup>9</sup>の超現主義／より脱<sup>10</sup>け出し一步前進する／今日までの超現実主義の功積は非常に顯著もの／であったが／今や新しい純粹なものが生証が必要だ／必然的人本主義 整算され」

※「転形期の思想」以下一連のメモは、昭和8年(1933)、東郷青児、阿部金剛、峯岸義一とアヴァンギャルド研究所創設を企図した際のものであろう。

- 渡辺修三、北園克衛などの詩の写しその他。

8. 未詳

「養治兄」という呼びかけで始まる手紙文。

9. 未詳

平戸廉吉「ローランサンのお伽噺の芸術」、木村莊八「近代絵画の道」、佐藤惣之助「草虫寸詞」その他の写しよりなる。

10. 未詳

夢二画集を筆墨で模写したものが大半。

11. 住所録

その他不明のもの1冊

岸田劉生《南瓜を持てる女》とその画面の縮小に関する一考察

中田裕子

ブリヂストン美術館所蔵の《南瓜を持てる女》(1914年7月7日描上ゲ<sup>1)</sup>)は、《黒き土の上に立てる女》(fig. 1)、100号の大作《水浴する三人の子供》(同年9月制作<sup>2)</sup>、焼失)、《画家の妻》等とともに、1914年10月銀座・田中屋で開催された「岸田劉生氏作品第1回展覧会」に出品された作品である。

石井柏亭は、この田中屋の個展開催を機に岸田の芸術に対する所感を述べて見る気になったとして、下記のように批評している(「岸田木村両氏の作品『卓上』1914年12月)。「日本人としては其異様なポーズに於て故更に乳を露はした、籠若しくは南瓜をもって土の上に立った女には私は同感することが出来ない<sup>3)</sup>」と。ここに述べられている「籠若しくは南瓜」とは、《黒き土の上に立てる女》と《南瓜を持てる女》を差すのであろう。そして、「籠若しくは南瓜」という後先は重要なことであろうと思われる。

《黒き土の上に立てる女》には、一重のような粗衣を纏い、右手で籠を把えた女が描かれている。一方、《南瓜を持てる女》には、厚手のように思える粗衣(着物)を纏い、骨太い足でしっかりと大地を踏締めている、そして、右手で南瓜を把え、意味ありげに左横に延ばした指先で宙を掴もうとしているかに見える女が描かれている。

岸田は、1913年7月に学習院漢学教授小林良四郎の三女、秦と結婚、翌1914年4月に長女麗子を設けている。《黒き土の上に立てる女》《南瓜を持てる女》は出産後の秦をモデルに得て制作された。この作品の制作については、結婚し、一女の父親となった岸田の環境の変化が大きな影響を及ぼしているに違いない。すなわち、夏に種を蒔き(女の腹部が大きいように思える)、秋にその収穫物——南瓜を手にし、それ故にか胸を露にした女が描かれているのではないか。この作品は、生命あるものを生み、己が豊かな胸でその生命あるものを育む、あるいは育んだ力強い母なるものを主題とした、宗教的な色彩の濃い作品ではなからうか(fig. 2)。同年9月19日、岸田は《水浴する三人の子供》の制作中の雑感を下記のように述べている。「こういふ方面に対する自分の将来に或る自信を前よりはっきりさす事が出来た<sup>4)</sup>」と。さらに、「自分の経験した内心の感じを、人間の顔や肉體によって抽象

し、中央に深き、そして、強き、善美を欲する人類の意志を、描く。同じく、偉大な人間によって、抽象する<sup>5)</sup>」とも、岸田は述べている。当時、そこには岸田の宗教的な象徴的意図が確かにあったと言えるのではなからうか。

若い頃の岸田は父吟香の影響、また、早くにその父と死別したこと等により、田村直臣の数寄屋橋教会に通う。1906年岸田は洗礼を受け、その日曜学校の教師になった。田村の長男朋良は、「あの人が描いたキリストやマリア像が巧かったことと云ったら」と述べている<sup>6)</sup>が、これは、岸田が画家を志す以前のことである。牧師を志したこともある岸田にとって、敬虔な基督教徒としての信仰の道が、画家を志すことによって、宗教的な理想像を具現する芸術、すなわち真なる美を二次元空間に創造するという思いに転化していったのであろう。「自分の作品にはまだ何と云っても現世の悪や醜を支配し切る力はない。永遠に描いて、永遠に人々の心に生き得る光と愛がない。それは自分の作品に滲で居る美がまだ如何にも力弱く小さいものだからだ<sup>7)</sup>」と、岸田は《南瓜を持てる女》を描いた2ヶ月後に述べている。《南瓜を持てる女》には、西洋における「聖母マリアの図像」の影響が少なからずあるのではなからうか。

1917年川幡正光が、岸田の鶴沼の家で《南瓜を持てる女》を見ている。その時のことを、「欄干に會て田中屋、流逸荘等の個展で観た絵が懸け列べてあった。『画家の妻』という南瓜を持って立っている夫人等もあった」と回想している<sup>8)</sup>。

しかるに、1919年4月京橋・日本電報通信社で開催された「白樺10周年記念主催岸田劉生作品個人展覧会」に《水浴する三人の子供》は出品されたが、《黒き土の上に立てる女》《南瓜を持てる女》等の作品は出品されなかった。『白樺』(1919年4月)にその理由を、岸田は下記のように述べている。「物の見方が、クラシックの感化を受け過ぎてあて前の時分にいろいろ発見し獲得したいい処のものがかへり見られてあらず、従って、自然の追求として、又本当のリアリズムとして物足りなく、さりとて、そこに生きた、本当の芸術的独立的な想像の美があるのではなく、只クラシックによって教へられた、或る感じを主にして製作してある」(「自分で踏んで来た道<sup>9)</sup>」)と。翌1920年に上梓された『劉生畫集及芸術観』に、岸田は《南瓜を持てる女》等の画家の妻群を、そして、《水浴する三人の子供》も図版として掲載しなかった。

先に引用した柏亭の批評の中で、柏亭は、岸田の資質を鋭く見抜いている。柏亭は田中屋で《黒き土の上に立てる女》《南瓜を持てる女》《水浴する三人の子供》を観た。そして、また下記のように批評している。「氏の性質は



fig. 1 《黒き土の上に立てる女》(行方不明)



fig. 2 《南瓜を持てる女》修理前 X線写真  
この写真を見ると、初めはずいぶん  
だらしなく描かれている。上衣が下  
の方まではだけている。

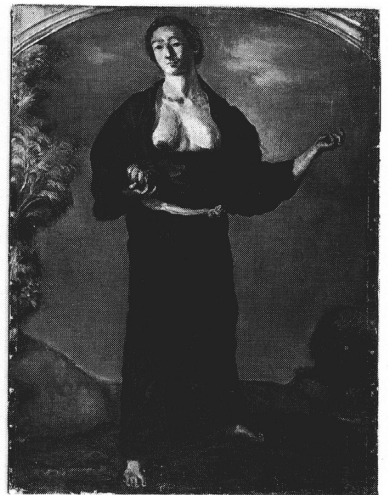


fig. 3 《南瓜を持てる女》修理中 裏打後(耳を  
伸ばした状態)



fig. 4 《南瓜を持てる女》修理前 左からの側光  
左右辺の縦の線はこの画集の図版にも見られる。創形美  
術学校の渡辺氏によれば、これは旧木枠のあたりである  
とのこと。

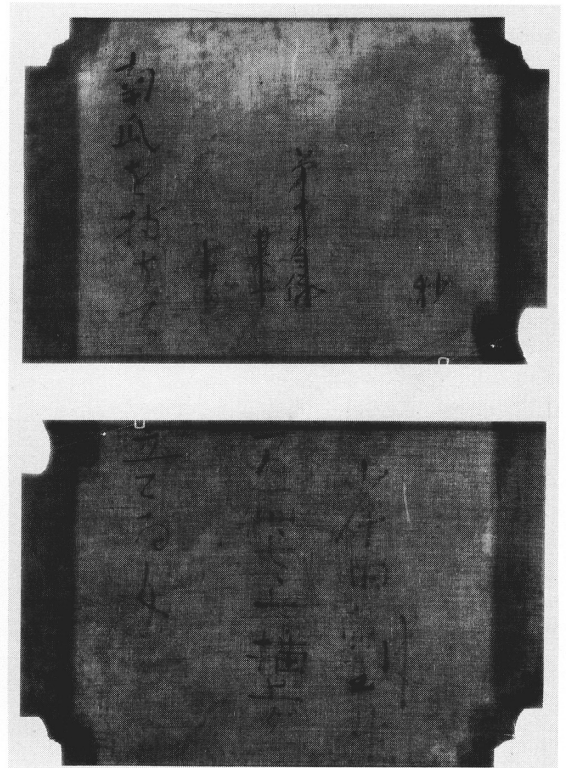


fig. 5 《南瓜を持てる女》修理後 裏面赤外線写真

之等の理想畫的方面へ向ふであらう。私の性質としては氏が引續いて寫實的な『冬の畑』を畫くことを希望する。(中略)復興期伊太利諸家のグランドな様式スタイルの要求、リューベンスの肉づけと日本のモチーフの混錯は今の處どうもまだまとまった一個の美を成さないやうに思はれる<sup>10)</sup>。(傍点引用者)

以後、岸田は象徴的構想画を制作していない。岸田のいうリアリズムとは、自然界の瞬時の姿をキャンバスという二次元の世界の枠に留めるというものではなく、自我を含めた自然の意志、すなわち、自然の内に密む確たるその真なる姿を、三次元空間のミメシスの世界の中に再現することなのであろう。やはり、岸田の宗教体験ぬきには語れないものであろう。田中屋の個展あるいはそれ以前から、「ナザレから、何の善き者出でんや<sup>11)</sup>」という思いを、向上心を変えることなく、岸田は内に秘めていたと思われる。つまり、洋画の本場である彼の地に、影響を与えるような画家になりたいという。

さて、『南瓜を持てる女』が展覧会に出品され、再び公衆の面前に姿を見せたのは、岸田の没後1930年に朝日新聞社画廊で開催された「岸田劉生遺作展覧会」であった。所蔵は岸田家。

では、1919年の個展に出品されず、また、『画集』にも収録されなかった『南瓜を持てる女』を、岸田家ではどのようにしていたのか。この作品を岸田がどのように扱っていたのかを想像できうる回想を、棟方寅雄がしている。岸田の鶴沼の家で『水浴する三人の子供』を偶然見た時のことである。「劉生には『水浴する三人の子供』という絵があって、ある日何かの拍子でこの絵が縁側の隅から持ち出されていたのを見たことがある。(中略)画集には省かれている。劉生はこの絵が気に入らないで片づけてあるのだ<sup>12)</sup>」と。とすれば、『南瓜を持てる女』も同じように岸田が亡くなるまで片づけられてあった筈である。

『南瓜を持てる女』は、その縦長の画面左右辺約14mmの縮少がなされていた。本年度の修復において木枠サイズを元に復し、額を変更した(「修復記録」参照)。

もし、『南瓜を持てる女』の縦長の画面左右辺約14mmの縮少(fig. 3)が岸田の意志によってなされたものであるならば、その時期はこの絵の完成間もない頃であろう。

事実、1941年にアトリエ社より刊行された土方定一『岸田劉生』に、『南瓜を持てる女』は図版掲載されているが、その図版の画面は縮少されていない(fig. 4)。そして、所蔵は森村家になっている。

ところで、1956年鹿児島市立美術館で開催された「森村・松方コレクション岸田劉生展」に『南瓜を持てる女』も出品されている。この絵が写っている展覧会会場の記録写真を見ると、不鮮明ではあるがすでに画面の縮少がな

されているように思われる。

つまり、『南瓜を持てる女』の縦長の画面左右辺約14mmの縮少は、1941年以降1967年までのある時期に第三者の手により処置されたものと思われる。

鹿児島市立美術館より「森村・松方コレクション岸田劉生展」の会場の記録写真を送付そして見せていただきました。記して御礼申し上げます。

## 註

- 1) 当該作品の裏面の書込み (fig. 5)
- 2) 9月19日に岸田は、「この繪を描き初めてから今日で十日程になる。もう七部通り出来た」と述べている。「今の自分及自分の仕事に就て雑感(展覧会の為めに)』『卓上』1914年10月、p. 15(『岸田劉生全集 第1巻』岩波書店、1979年、p. 458)
- 3) 東珠樹編『近代画家研究資料 岸田劉生 II』東出版、1975年、p. 13
- 4) 『岸田全集 第1巻』pp. 458~459
- 5) 木村莊八「草土社『みづゑ』1946年11~12月(東『岸田 I』1975年、p. 99)
- 6) 富山秀男『岸田劉生』岩波新書、1986年、p. 37
- 7) 『全集 第1巻』p. 449
- 8) 川幡「岸田劉生の思い出—劉生を知るまで『この道』1960年5月(東『岸田 III』1977年、p. 161)
- 9) 『劉生畫集及芸術観』(『全集 第2巻』1979年、p. 521)
- 10) 東『岸田 II』p. 13
- 11) 「今の自分及び自分の仕事に就て雑感」(『全集 第1巻』p. 444)の最初の言葉である。しかし、岸田は、キリストの聖誕の地としてナザレを差している分ではない。『劉生畫集及芸術観』の序文に、「自分の仕事は洋風の美術であって、この技法では本場といふ考えがあらうから。さうして、この小さな『ナザレから、何か善きもの出でんや』と彼等は思ふであらうから」とある。(『全集 第2巻』p. 346)
- 12) 『たいせつな風景』(神奈川県立近代美術館、1967年)収録：棟方「劉生と私」(東『岸田 III』pp. 219~220)

## 美術館案内

### ブリヂストン美術館

**場所** 東京都中央区京橋 1-10-1(〒104)  
TEL. (03)563-0241

**開館時間** 午前10時～午後5時30分

**休館** 毎月曜日 年末年始(12月28日～1月4日)

**入場料** 個人：  
一般¥500 大・高生¥400 中・小生¥200  
団体(15名以上)：  
一般¥400 大・高生¥300 中・小生¥150  
なお、特別展の場合は変更することがある。

### 石橋美術館

**場所** 福岡県久留米市野中町1015  
石橋文化センター内(〒830)  
TEL. (0942)39-1131

**開館時間** 午前10時～午後5時

**休館** 毎月曜日 年末年始(12月28日～1月4日)

**入場料** 個人：  
一般¥300 大・高生¥200 中・小生¥150  
団体(20名以上)：  
一般¥250 大・高生¥150 中・小生¥80  
なお、特別展の場合は変更することがある。

## Guide to the Museums

### Bridgestone Museum of Art

**Address** 10-1, Kyobashi 1-chome, Chuo-ku,  
Tokyo 104, Japan  
Phone : (03)563-0241

**Museum Hours** Open daily from 10.00 a.m.  
to 5.30 p.m. except Monday  
Closed from December 28 to  
January 4

**Admission** Adults ¥500  
Students ¥400  
Children under 15 ¥200

### Ishibashi Museum of Art

**Address** 1015, Nonaka-cho, Kurume,  
Fukuoka-ken 830, Japan  
Phone : (0942)39-1131

**Museum Hours** Open daily from 10.00 a.m.  
to 5.00 p.m. except Monday  
Closed from December 28 to  
January 4

**Admission** Adults ¥300  
Students ¥200  
Children under 15 ¥150



石橋財団職員

事務局

局 長 門司一二三  
総務部 総務部長 朝比奈仙二  
渡 辺 瞳  
押 本 仁 子

ブリヂストン美術館

館 長 嘉 門 安 雄  
事務部 事務部長 大 崎 新 一  
中 村 邦 子  
垣 並 純 子  
沢 田 栄 子  
主 任 柴 田 孝 三  
安 西 竹 雄  
田 中 朝 次 郎  
岡 本 愛 子  
石 井 艶  
渡 辺 清 美  
青 柳 真 子  
加 藤 伸 子  
学芸部 学芸部長 嘉 門 安 雄 (兼務)  
学芸課 学芸課長 阿 部 信 雄  
主任学芸員 大 森 達 次  
中 田 裕 子  
船 野 淳 子  
小 坂 智 子  
中 山 三 善

石橋美術館

館 長 谷 口 鉄 雄  
事務課 事務課長 渡 辺 啓 一 郎  
野 田 朋 子  
富 松 弘 美  
原 朋 子  
学芸課 学芸課長 田 内 正 宏  
橋 富 博 喜  
杉 本 秀 子  
後 藤 純 子  
植 野 健 造

石橋財団  
ブリヂストン美術館  
石橋美術館  
1985年度館報/第34号  
1986年10月発行

Ishibashi Foundation  
Bridgestone Museum of Art  
Ishibashi Museum of Art  
Annual Report No. 34(1985)  
Published 1986





